第3回日韓3女子大学交流合同シンポジウム 参加報告書

実施期間:2012年7月16日~18日

実施場所:大韓民国梨花女子大学校キャンパス





お茶の水女子大学 理学部

Faculty of Science, Ochanomizu University

▶お茶の水女子大学TOP

▶理学部TOP ▶ ENGLISH

数学科

物理学科

化学科

生物学科

情報科学科

TOP>NEWS&TOPICS>第3回日韓3女子大学交流合同シンポジウム

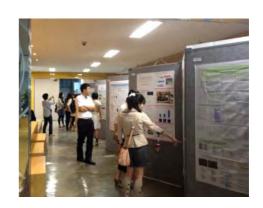
▼メニューを選択

第3回 日韓3女子大学交流合同シンポジウムに参加

2012年7月16日から18日まで、韓国の梨花女子大学校において、梨花女子大学校と日本女子大学および本学の3大学の理系大学院学生の交流を目的とした第3回「日韓3女子大学交流合同シンポジウム」が開催されました。本学からは、文部科学省特別経費「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」事業の支援を受けて、21名の大学院学生と4名の教員が参加しました。また、今回は本学の理数学生応援プロジェクトの平成23年度アドバンスト・プログラム及びプレ卒研で優秀学生として表彰された学部学生9名も、ポスター発表で参加しました。シンポジウムでは、各大学から参加した学生が、研究内容や研究成果について英語で発表しました。

本学からの世話人として、第1回から引き続き参加している生物学科由良敬教授に今回のシンポジウムの様子について報告してもらいました。





<由良教授の報告>

由良 敬 (ゆらけい) お茶の水女子大学 大学院人間文化創成科学研究科 研究院 先端融合部門 先端融合系 教授 生命情報学教育研究センター センター長 (理学部生物学科)

理系大学院生の英語による研究発表能力の鍛錬、海外での研究会参加の訓練、および日韓女子大学の友好関係構築を目的として、一昨年から日本女子大学大学院、梨花女子大学校大学院、および本学大学院の理系大学院の学生が、合同で研究発表会をおこなってきている。第3回目の本年は、7月16日~18日の3日間、大学院生27名、教員5名、更に本学からは研究活動をおこなっている学部生9名を含む総計41名で韓国梨花女子大学校を訪れた。昨年、一昨年度と12月に開催してきたが、今回は実験的に夏を開催時期とすることにした。第2回目の開催から半年しか間隔がないために開催準備期間が短く、また梨花女子大は夏休み期間であるために、開催準備が非常に大変であった様子がうかがわれた。細かい点で多少のトラブルは発生したが、シンポジウムはスムーズに展開した。梨花女子大の準備に対するご努力には、いつもながら敬服する。例年通り、初日は学生交流会、2日目は化学生物系と情報数学物理系のふたつに分かれての口頭発表会、3日目はポスターセッションがおこなわれた。初日の到着直後の昼食会場では、梨花女子大学校の宣伝ビデオが流れていたが、ハリウッドの映画並みの新しいビデオ映像であり、広報にかなりの力を注いでいることをあらためて見せつけられた。理工系部分の編集は、理学部長自らおこなったそうである。その後の学生主催の学生交流セッションは、昨年同様うまくいったらしく、シンポジウム期間を通して、日韓の学生の交流

を随所で見ることができた。第2日目の発表においては、今年度は韓国側からの発表が少なかったことが残念であった。夏休み期間で多くの学生が国際会議に参加しているためとうかがった。それでも韓国側の学生は、流ちょうな英語で有名な科学雑誌に掲載された論文の内容を次々と発表し、日本側はやや圧倒されるところがあった。昨年度は学生の発表レベルは互角と感じたが、今年度は再び引き離された感があった。日本側の教員としては、がんばらねばと思った次第である。しかし今回は、日本側の学生が口頭発表に対して積極的に質問をし、各自の口頭発表に対する梨花女子大教員からの質問に対しても、何とか回答しようと努力していたことは、大きな収穫であった。口頭発表に対する学生からの質問がほとんどなかったことが例年問題点としてあげられていただけに、今回のシンポジウムでは、

明るい未来が見えたと思っている。第3日目のポスター発表では、日韓の学生および教員が各自のポスターの前で、 討論している様子があちらこちらで見受けられたのもよかった。特に本学から参加した学部学生が張り切って発表し ている姿は印象的であった。このような議論を通して、学生間や教員間の交流が深まっていくことが期待できよう。 このシンポジウムから、ぜひとも日韓の共同研究が生まれてほしいと感じる。

今回のシンポジウムでは、昨年度に引き続き、学生間の交流と各自の研究を英語で他分野の研究者に紹介することを目標としてきた。日本女子大学および本学の学生諸君は、5月から行っていた発表練習の甲斐もあり、口頭発表での質疑応答ができるようになったのは大きな収穫であった。学生諸君を韓国まで引率した意義は十分にあったと感じている。学生諸君にとっては、ソウルでの見聞と梨花女子大生との交流が、日韓の歴史や韓国の潜在的力を肌で感じるよい機会になったことは間違いなく、自身の現在と未来を考えるよい材料になってくれたと思う。

▲ベージトップへ

Copyright@2010 Ochanomizu University. All Rights Reserved.



参加者名簿

氏名	所属	学年	研究室
照井宏子	遺伝カウセリング	D3	川目研
青木菜々	化学科	M2	近藤研
井上芙実香	化学科	M2	相川研
大塚美穂	化学科	M2	鷹野研
木下満里絵	化学科	M2	棚谷研
佐孝和	化学科	M2	山田研
野上栄美子	化学科	M2	矢島研
萩生田綾乃	化学科	M2	相川研
松脇いずみ	生物学科	M2	加藤研
富田千尋	化学科	M1	小川研
中川結希	化学科	M1	三宅研
藤木さゆり	化学科	M1	鷹野研
三橋佳奈	化学科	M1	小川研
渡邊隆子	物理学科	D2	出口研
菅悠美	物理学科	M2	浜谷研
菅江祥子	物理学科	M2	出口研
平井弘実	情報科学科	M2	小口研
山下暁香	情報科学科	M2	小口研
高橋沙綾	物理学科	M1	森川研
八反田香莉	情報科学科	M1	伊藤研
福手亜弥	情報科学科	M1	伊藤研

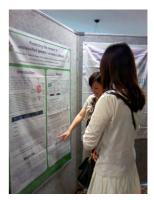
参加者名(Name):照井 宏子

所 属(Affiliation):ライフサイエンス専攻 遺伝カウンセリング領域

(指導教官(supervisor):川目 裕)

亲(Presentation): Predicting the impact of unclassified genetic variants in MSH6 based on a multivariate analysis of protein polymorphism

今回のシンポジウムは、初めて英語によるプレゼンテーションを行う機会となりました。ポスター発表自体も初めてであり、シンポジウム参加を通して、研究者として今後のために非常に貴重な体験をすることができました。特に、シンポジウムに向けての週1回のプレゼンテーションの講義は、初めての英語によるプレゼンテーションの練習期間として大変有意義なものでした。今回の経験は、今後の英語によるプレゼンテーションをポスター発表を行う自信に繋がったと思います。プレゼン後の質問に対しては、正確に答えることができなかったものもありました。研究だけでなく、その背景についても、英語で説明できるよう、事前準備の重要性を痛感しました。また、他の人の



発表に対して、質問をすることができませんでした。多くの人の前で質問する積極性が次の課題だと感じました。ポスター発表では興味をもったポスターに対して、梨花女子大の学生さんにも質問をすることができました。様々な領域の発表があるため、なかなか理解できないこともポスター発表だと、直に文章を読みながら質問できるので、今回のシンポジウムのようにテーマが広い場合は、ポスター発表がとても有益に感じました。

梨花女子大は広大なキャンパスの中に多様な学科があり、非常に恵まれた環境であることを、実際のキャンパスや、プロモーションビデオ、ラボツアーから感じることができました。特に、ライフサイエンス系のラボツアーでは、教授の意向により壁のない広いオープンラボとなっているのがとても印象的でした。オープンになっているため、隣の席では他の研究室の学生が実験していることで、情報交換やコミュニケーションが頻繁に図られているとのことでした。研究をしていると、視野が自分の研究室の領域に狭まりがちですが、こうしたオープンな環境は、他領域の刺激を受けながら広い視野で研究を行えるというメリットがあるように思います。日本でも、様々な企業の研究者が出入りするオープンラボを見学させて頂いたことがあり、色々な情報を得る機会になるとのことでした。お茶大ですぐに実施するにはハード面の改良が必要なため、なかなか難しいとは思うのですが、こうした環境を少しずつ取り入れることも研究の活発化に繋がるのではないかと思います。

今回のシンポジウムに参加して少し残念だったことは、参加者のほとんどがお茶大生であり、梨花女子大の学生の参加がほとんどみられなかったことです。初日のソーシャルイベントでは、そのイベントだけにだけ参加する学生とグループを組んだため、シンポジウムに臨む温度差もあったためか、深い交流には至りませんでした。韓国のお土産やおいしいお店の話しなど、せっかくの大学生同士の交流にしては物足りなさを感じました。また、椅子が固定されたタイプのスクール型の部屋で行われたため、複数名が一列に並んでグループワークに取り組んだ結果、話し声が聞こえず、あまり交流に向いた環境ではありませんでした。初日のレセプションパーティも、梨花女子大の学生は1~2名だけであり、昨年の参加者の話しと比べても、韓国側の参加者の少なさが際立っているように感じました。翌日のプレゼンテーションも、参加している梨花女子大の学生は司会者と発表者と数名の教授陣だけで、質問も日本の学生と先生、梨花女子大の先生

数人だけだったため、お茶大内で実施したリハーサルのような雰囲気でした。そのため、 最初の二日間は、梨花女子大の学生さんと交流がほとんどできなかったこともあり、と ても残念な思いが強く残りました。

幸い、二日目の夕食時には、梨花女子大の学生イムさんと友達になることができ、最 終日のフリータイムにはソウル市内を案内をしてもらうことができました。お互い英語 力には課題があったたため、辞書を片手にコミュニケーションを図りながらではありま したが、楽しい時間を過ごすことが出来ました。また、実際に市内を案内をしてもらう ことで、韓国の大学生の生活を知ることもできました。ランチは、大学近くの地元のレ ストランで食事をしましたが、韓国には割り勘の文化がほとんどないことを初めて知り ました。景福宮を観光した後、カフェで大学生活などについての話しを聞くことができ ました。今回、シンポジウムの時期はちょうど夏休み中とのことのでしたが、大学とし ては夏休みでも研究室には夏休みはないとのことで、日本の研究室と同じだなと思いま した。また、自由ではあるようですが、大体のコアタイムが 9 時~20、21 時というこ とで、理系の研究室は似たような状況のようです。しかし、イムさんに将来のことを聞 いたところ、"Of course, I want to be a professor!"との回答で、梨花女子大生の研究者と しての意識の高さを感じました。梨花女子大では、研究室に所属する時期が決まってお らず、いつでも研究を始められる環境があるとのことでした。早い時期から研究を始め るためか、学部生でも豊富なデータを発表をしている学生さんが多く見受けられたこと にも納得できました。お茶大の理数応援プロジェクトも、早い時期から研究に携われる 機会なようなので、学生の意識を高めるのに非常に効果的なように思います。就職に関 する話題でも日本と同じ状況なようで、韓国でも、基礎科学の領域は応用科学に比べて、 博士号を取得しても就職が難しいということでした。研究者を続けるためには、少ない 就職先を獲得するために、大学の早い時期からの研究が非常に重要であると感じました。

今回のシンポジウムを通して、初めての英語によるプレゼンテーション、ポスター発表をする機会が得られ、また、韓国の大学生と交流することで様々な刺激を得ることができました。この経験を生かし、今後は国際学会などにも積極的に参加していきたいと思います。

参加者名(Name):青木 菜々

所 属(Affiliation):理学専攻化学生物化学コース(指導教官(supervisor):近藤 敏啓) 発 表(Presentation): Structural Studies on Self-Assembled Monolayer of Porphyrin Derivatives on Au(111)

今回のシンポジウムで、初めて英語での口答発表、ポスター発表を経験しました。そのため自分の研究内容の英語でのスライド作成は初めてでした。英語が苦手なため、とても不安でしたが、シンポジウムのために受講した授業で、スライドの作り方、質疑応答のときの英語表現、英語での発表のコツなど、今後自分の研究内容や成果を国際的な場で発表するときにも非常に役立つことを多く学ぶことができ、大変有意義なものとなりました。また、他分野を専攻する人もたくさんいるなかで、い



かに自分の研究に興味を持ってもらい、わかりやすくかつ簡潔に、しかも英語で説明するということに苦戦しました。授業の中で実際発表してみて、自分では全く予想もしないようなところが他分野の人にはわかりにくかったり、予想していなかった質問をされたりと、他分野の人からの視点を知ることができました。さらに、他分野の人の発表をきくことで、専門用語の説明やわかりやすい言い回しを考えたり、図やアニメーションを用いる工夫、どんな話し方やスピードが聞きやすいかなどを体感でき、それを自分の発表に取り入れることで、徐々に改善していくことができ、とても良い経験となりました。また、導入部分の基礎的なところからわかりやすく説明しようとすることで、自らの研究の目的、研究で使用している分子や機器の原理と理論、測定結果から結論を導く過程や理屈など、改めて考え直し、理解を深める機会にもなりました。私は英語が非常に苦手で、人前で英語で話す機会もこれまでほぼなかったので、初めは恥ずかしさや苦手意識があり、堂々と話すことができませんでした。実際に発表してみて、自分の英語能力の低さや、専門用語の発音の難しさを実感しました。しかし、授業で発表練習を重ねていくことで、さまざまな英語表現や話し方のコツを丁寧に指導していただき、次第に英語に対するネガティブなイメージが薄れていき、まだまだだとは思いますが、堂々と英語で話せるようになってきたと思います。

本番のシンポジウムでの発表は、つまってしまうところや、うまく説明しきれなかったところがあり、まだまだ課題があるなと感じました。質疑応答でも、何を聞かれているか理解できるし、こう答えたいという考えはあるのに、それをうまく英語で伝えることができず、悔しい思いをしました。今回は発表内容を覚えることに精一杯でしたが、このシンポジウムをきっかけに、ディスカッション能力もこれから改善していきたいと思いました。

梨花女子大学は総合大学ということで、とても広く、施設が大変充実していて驚きました。研究室案内で理学部の校舎を案内していただいたとき、廊下の壁にポスターやこれまでに発表し雑誌に掲載された論文などがたくさん掲示されていて、意欲の高さとレベルの高さに驚き、とても感心しました。また、研究室の中も見させていただき、お茶大では化学科で1、2台しかないような機器が各研究室においてあったり、広くてきれいな実験スペースがあり、とても充実した環境でうらやましいなと思いました。韓国の学生はとても英語が堪能で、発表の質疑応答もとてもスマートでレベルの高さを感じました。学生同士の交流イベントや研究室案内でも、積極的に英語でコミュニケーションをとってくださり、自分の意識と英語能力の低さを改めて実感し、学習意欲がわきました。また、韓国の学生はみんな英語だけではなく、日本語も堪能で、日本語で話しかけてきてくれる学生もいました。韓国の学生は、コミュニケーションをとろうという意識が非常に高いことを感じ、本当にすごいなと思いました。私はこれから、国際的な場で活躍していきたいと考えているので、今回のシンポジウムで出会っ

た同年代の韓国の学生をみて、もっともっと国際的なコミュニケーション能力を身につけなくてはいけないし、自分の専門はもちろん、さまざまな分野の知識を習得しなければならないなと強く感じました。これからは機会があれば積極的に学会やシンポジウムに参加し、今回感じた自分の足りないところを改善していきたいと思える、とてもいい機会でした。

参加者名:井上 芙実香

所 属:理学専攻化学・生物化学コース(指導教官:相川 京子)

卷 表(Presentation): Possible involvement of CD166/ALCAM glycoforms in the metastatic potential of endometrial cancer cells

当シンポジウムを終えて、参加することができ本当に良かったと感じています。

昨年12月に参加した学会で突然英語でのポスターの説明を求められ、日本の学会として完全に油断していた私は当惑してしまいました。私のたどたどしい説明の後、結局質問された方は日本人ということが判明し、英語の勉強についての激励やアドバイスを受けました。この経験から英語での研究発表には強い思い入れがあり、参加を決意しました。

2か月半の間、担当の由良先生や指導教官の相川先生からご教授いただき、また参加学 生同士アドバイスを掛け合いながら準備を進めました。

当初は英語でのプレゼンテーションに構えていましたが、蓋を開けてみると英語以上に 専門外の方々への説明の方が大変でした。大学4年次に経験した教育実習でも似たよう なことを感じましたが、分かりやすく且つ誤りのないようにプレゼンテーションを構成 することはとても難しかったです。しかし日頃から自分の研究は複雑だと感じていたた め、内容を整理する良い機会ともなりました。発表自体も授業とリハーサルを含め計4 回練習する機会を与えていただき、様々な内容やスライドを試すことができました。そ の中で変更や改善を繰り返し本番に臨むことができました。

本番はこれまでの練習成果を発揮できたように思います。質問が出なかったことなど 内容に関する反省点は多々ありますが、広いホールで国籍や専門の違う方々に対して自 分の研究を紹介することができ、とても良い経験になりました。他の方々の研究に対し ても積極的に質問することができ、充実した時間となったと思っています。

ラボツアーも開催してくださり、梨花女子大学の広大で近代的な研究設備を拝見することができました。1フロアに化学の分析機器もあればラットや細胞用のクリーンベンチなどもあり、また一つの建物内にすべてのサイエンスの機器が凝縮されていて、多様な機器をスムーズに使用できる環境に感動しました。さらに、私は大学内でポスターの掲示しか見たことがありませんが、梨花女子大学の場合は建物内の至る所に有名な雑誌に掲載された論文が掲示されていて、レベルの高さに圧倒されてしまいました。

ポスター発表では私の研究内容に興味を持ってくださった日本女子大学の方と主にディスカッションを行いました。その過程で落ち着いて話し合ってみると、プレゼンテーションの中で不足していた部分や分かりにくい部分が明確となり、違った角度から自分の発表を見直すことができたと思います。質問者としては梨花女子大学の生物を専門とされている方のポスターを拝見したことが印象に残っています。彼女は都市と地方でのセミの種類を比較していて、研究方法など自分のものとは大きく異なり面白かったです。とても気さくに質問に答えてくださる方で、私の拙い英語にも耳を傾け真剣に答え

てくださいました。お互いの研究について冗談を交えながらお話でき有意義で楽しい時間を過ごすことができました。

このように梨花女子大学の方々とも多くコミュニケーションを取ることができました。初日のソーシャルワークでは数名のグループでクイズゲームやお互いの国についての情報交換を行い、おいしい飲食店について地図を書きながら説明していただき、一方で私たちは日本語や日本のドラマについての情報を提供しました。

異文化に触れる時はいつもとても知的好奇心を刺激されます。今回が私にとって初めての韓国旅行となりましたが、大学内やソウル市内に教会が多く見受けられ、クリスチャンの多さに驚きました。梨花女子大学の方々は日本を好きでいてくださり英語だけでなく日本語も堪能でしたが、私は隣国にも関わらず韓国について何も知らなかったことを恥ずかしく思いました。

また日本で発表の練習を授業中行った際に私は自己紹介文で "I live in Yokohama with my family" と発現した際に、由良先生から "family" とは自分が持っている、自分が責任者である家族のことを言うと教わりました。私はまだ結婚しておらず両親と暮らしているので "with my parents" と変更し本番発表しました。なぜ日本と「家族」という単語についてそのような違いが生じるのかまだ調べていませんが、おそらく宗教的なバックグラウンドに原因があるのではないかと考えています。せっかく気になったので研究内容について見直すだけでなくそのような文化の違いについても今後勉強していきたいと思いました。

プレゼンテーションの準備やポスターの作成など自分自身のことに精一杯となって しまいましたが、本番を迎えるに当たってとても多くの方々にご尽力いただきこの場が あるのだと感慨深くなりました。お世話になった方々を挙げると切りがありませんが、 梨花女子大学の方々を始め、シンポジウムを開催してくださった方々すべてにこの場を お借りして感謝申し上げたいと思います。 参加者名(Name):大塚 美穂

所 属(Affiliation): 理学専攻化学・生物化学コース(指導教官(supervisor): 鷹野 景子) 発 表(Presentation): Theoretical Study of Internal Alkyne-to-Vinylidene Isomerization at Ruthenium Complex

私は平成24年度7月16日~7月18日の間,第3回日韓3女子大学交流合同シンポジウムに参加し,韓国の梨花女子大学にて英語での研究発表を行いました。本シンポジウムの大きな特徴として,「言語が英語であること」と「聴衆が異分野の人であること」の2点が挙げられると思います。私は,本シンポジウムを通して「英語力」及び「プレゼン能力」を向上させたいという思いから,参加を希望し,その機会に恵まれました。



韓国に行く前にまず、大学の授業でプレゼンの練

習を行いました。英語での発表は慣れていないこともあり、授業の準備はなかなか大変でしたが、この練習は非常に有り難いことであったとあらためて思います。英語の表現を学ぶことができるということはもちろんですが、それ以上に、異分野の人に自分の研究を聞いてもらえるということが非常に良い経験でした。異分野の人に分かってもらうためには、基本的なことを踏まえつつ、研究の詳細よりもイメージで全体像を把握してもらえるような発表をする必要があると思います。そしてそのためには、発表内容に関する自身の理解も深くなければなりません。今回の発表ではまだまだ改善の余地がありますが、そうした「聴衆の理解を得るための発表」という意識を高めることができたと思います。また、他の人の研究発表を聞くことができるという点も良かったです。普段聞くことがないような研究にも触れることができますし、自分の発表を見つめなおす機会にもなるからです。実際に韓国で行った発表では、授業で練習した成果を活かし、専門的な内容になりすぎないように心掛けて発表することが出来たと思います。これからも、聴衆がどのような人であるかを意識し、分かりやすい発表をしていきたいと思います。

シンポジウムを通して、韓国の学生はもちろんですが、日本の学生からも刺激をもらいました。日本人は英語が苦手であるということはステレオタイプとしてありますし、私もその意識を日頃からもっています。確かにそうした部分もあるでしょうし、実際、韓国の学生はみんな英語が上手でした。しかし、日本の学生も負けていないというのが率直な印象です。同年代の日本の学生のそうした姿は、とても良い刺激になりました。私も今後、もっと英語力やプレゼン力を伸ばし、国際的な場でも堂々と発表できるように努めていきたいと思います。また、反省点として、あまり質問を出来なかったことが挙げられます。私が聞いていた会場では、生物や生化学分野の発表が比較的多く、自分の専門と異なるため内容がなかなか理解できませんでした。ただ、今回のシンポジウムの間、どんなに分からなくても一生懸命に聞くということを繰り返したおかげで、異分野の研究発表の聞き方を学ぶことができたように思います。難しい専門用語や細かい記述にとらわれすぎず、キーとなる単語を頼りに全体の流れを把握するようにすると、発表内容をフォローしやすくなります。本シンポジウムを通して、発表側だけではなく、聞く側の態度という面においても成長することが出来たと思います。

3 日目にはポスター発表の時間もありましたが、個人的にはこの時間が一番楽しいものでした。ポスター発表では、少人数のディスカッションを通して口頭発表の場合よりも詳しく聞くことができるので、本当に基礎的なことや単語の意味から質問して説明してもらいました。口頭発表のときには理解できなかった研究も、時間をかけて丁寧に説明してもらうことで理解が深まり、そうすると、どれもとてもおもしろい研究であることが分かります。このような貴重な機会は、こうした異分野かつ同年代のシンポジウムであるからこそ得やすいものではない

かと思いました。普段参加する学会などでは、同じ分野を専門にする人に対して、あまりにも基本的すぎる質問は躊躇われますし、周りに他の研究者や先生方がいるとどうしても意識してしまうからです。とことん質問して説明してもらう機会は、今後いっそう減っていくように思いますが、大学内などでもそうした機会がもっとあればいいなと思いました。また、友人と研究について話す時間をもっとつくっていきたいと思っています。

シンポジウム以外の時間には、韓国の学生が研究室ツアーをして下さいました。大きな実験機器や装置が各研究室ごとにあり、良い研究環境が整っていると感じられました。梨花女子大学はとても広く、またとてもきれいで、お茶の水女子大学のキャンパスとのギャップに驚きました。羨ましさすら感じるキャンパスでしたが、勾配が多いことには苦労させられました。山のような坂道がたくさんあり、大きな荷物を持っていると、寮やシンポジウム会場にたどり着くのも一苦労です。しかし、木々が多く自然に溢れるキャンパスで、とても素敵な大学でした。先生方や学生もとても優しく、交流会やバンケットなども楽しい時間を過ごすことが出来ました。また、韓国の街にも出掛けました。街には日本語の表記がたくさんあり、またお店の人がすごく日本語が上手なことに驚きました。交流会のときに、韓国の学生がおすすめのお店などを教えてくれたこともあり、私が一番楽しみにしていた韓国料理は、期待通り、安くておいしく、大満足でした。韓国に滞在した3日間は、シンポジウムもそれ以外の時間も、とても楽しく、充実した時間を過ごすことができたと思います。

今回, 日韓3 女子大学交流合同シンポジウムに参加し, 英語やプレゼンの能力を向上させることができたと共に, 同年代の学生から異分野の研究を聞くという貴重な経験をすることができました。これから自分の研究を進めていく上で, この経験を励みにし, よりいっそうの努力をしていきたいと思います。

最後に、本シンポジウムに参加するにあたり、お茶の水女子大学の先生方をはじめ多くの方々のご尽力、ご協力を賜りました。この場を借りて深く感謝申し上げます。また、韓国で温かく迎えてくださった、梨花女子大学の先生方・学生の皆様にも、心より感謝申し上げます。有難うございました。

参加者名(Name):木下 満里絵

所 属(Affiliation):理学専攻 化学・生物化学コース(指導教官(supervisor):棚谷 綾) 発 表(Presentation):Development of Novel Coumarin Derivatives as Progesterone

Receptor Antagonists

前回、前々回と参加した先輩、友人の話をきっかけに今回参加することにした。シンポジウム参加の目的は、① 実践的な英語力を身につけたい ② 梨花女子大や日本女子大の似た分野を専攻している学生はどんな研究をしているのか知りたい ③ 韓国文化に触れたい の三点。

参加が決まり、シンポジウムに向けた発表練習の場として、毎週火曜日1・2限の講義を受講した。初回の授業で、良いプレゼンとはどういうものか?というお話があり、英語だけでなく普段のプレゼンの際にも参考になるプレゼン法を学ぶことが出来た。そして、2回目以降は毎週、学生が持ち回りで英語での発表を行った。英語での口頭発表経験したことのなかった私にとって、前に出て英語を話すことですら初めは抵抗があった。しかし、毎回由良先生からのフィードバックがあるために改善点や注意点を意識することや、他の人の発表を通して上手な使い回しや間の取り方などの発表姿勢を参考にすることで、授業全体を通して徐々に成長出来た。また、発表に付随して英語での質疑応答を練習した際には、他分野の発表に対する質問の難しさを学び、逆に自分の発表の際に、誰にでもわかりやすいプレゼンを意識することに活かすことができた。この授業で発表時間を徐々に増やしながら行った練習のお陰で、本番用のプレゼン資料もスムーズ作成することが出来、英語でのプレゼンに対する抵抗もなくなっていた。

そして、シンポジウム1日目。昼過ぎに 梨花女子大に到着して持った第一印象 は、とにかく広い!綺麗!本当に女子 大?というものだった。校内地図を参考 に会場であるサイエンス棟までの道のり は、広大かつ常に上り坂であり、建物内 のエレベーターやシャトルバスの利用術 を知らなかった私たちにとって、この3日 間で最もきついイベントだった。なんとか 会場に着き、用意して頂いた昼食をと った後、開会式に参加した。続く交流 イベントでは、日韓でグループを作り、



学内ツアーガイドさんと化学科 M2@ECC

日韓クイズを協力して解くことで仲良くなることが出来、フリートークの時間に、おすすめの韓国料理屋さんなどを気さくに教えてくれた。また、趣味で日本語を勉強している学生が多く、英語のみならず日本語でコミュニケーションがとることができ、私も韓国語を少し勉強してからシンポジウムに臨めば良かったな、と思った。その後の学内ツアーでは、学生さんがガイドして下さって、研究室や ECC を見学した。やはり全体を通して広い、綺麗の印象は大きかったが、研究室で使用している機器や、実験風景などはほぼ同じで親近感が湧いた。

シンポジウム2日目。この日は朝から夕方まで、分野別(生物、化学/情報)に2部屋同時進行で口頭発表プログラムが開催された。進行も日韓の学生で行った。今回の目的にあげた、梨花女子大や日本女子大の似た分野を専攻している学生はどんな研究をしているのか知りたいということに関しては、国や大学に関わらず研究されていることは類似していて、面白い研究ばかりだという印象を受けた。中には理解出来なかった研究もあったが、きっと自

分の英語力不足だとおもうので、今後の英語学習に対する意欲に繋がった。自分の発表においても、質疑応答の際に、質問内容は理解出来、それに対する答えも自分の中にあるのに、上手く英語で答えられなかったことがもどかしく、残念だった点なので、英語での表現力の勉強も今後重点的に注力したい。

口頭発表プログラム終了後のbanquetでは、様々な種類の韓国料理を頂くことが出来、発表を終えた安堵感も相まって存分に楽しめた。その後の自由時間には、1日目に韓国の学生さんに教えてもらった焼肉やパッピンスのお店に訪れ、韓国の食文化に触れることで、3つめの目的も達成することが出来た。韓国を満喫しすぎて、山の上にある宿泊寮の門限ぎりぎりになってしまい、きつい坂を皆で駆け上がったことも、今回のシンポジウムの中でのいい思い出の一つだ。

あっという間にシンポジウム3日目。この日はポスター発表プログラムが開催された。前日の口頭発表の際に気になった研究についてより深く理解することが出来た上に、自分の研究についても英語でディスカッション出来たため、とても有意義だった。その後、閉会式が開かれ、最後に参加者全員で記念写真を撮って、シンポジウムの全てのプログラムが終了した。

この3日間だけでなく、そのための準備期間も含め、今回のシンポジウムに参加したことで、自分に何が欠けているか、ということを強く感じ取ることが出来た。英語力だけでなく、伝える力だ。韓国の学生の積極性・伝える力を見習って私も頑張ろう、と素直に思えたことは、今後の自分にとってプラスになると思う。また、当初持っていた目的は様々な形で果たすことが出来ため、この経験を今後に活かし、向上心と広い視野を持って研究に励んでいきたい。

参加者名(Name): 佐孝 和

発

所 属(Affiliation):理学専攻化学・生物化学コース(指導教官(supervisor):山田眞二)

表(Presentation): Structure and Reaction of Styrylpyridine Derivatives
Hydrochloride Hydrate Crystal

以前より、過去に日韓3女子大学交流合同シンポジウムに参加した研究室の先輩や同期から、とても有意義な時間を過ごすことができたとの話を聞いていたため、本シンポジウムに興味を持っていた。しかし、当時は英語での発表に不安を感じ、参加を躊躇ってしまった。今回参加を決めたきっかけは、博士課程へ進学することを決めたためである。今後は英語での口頭発表の機会が訪れる可能性もあるため、英語での発表練習および実践が経験できる本シンポジウムは絶好のチャンスであると考えた。



発表練習は、英語発表初心者でも分かりやすい口頭発表の基本的な話から始まり、発表は語学力よりも発表へ臨む姿勢がより重要であることを学んだ。3分間の簡単な自己紹介、5分間の研究紹介、8分間の研究発表、といったように、少しずつ発表時間を伸ばしながら発表に慣れていく方法は、非常に自分に合っていたと思う。また、発表だけでなく、英語での質疑応答の練習もでき、まだまだ課題は残るが、なかなかできない経験をさせてもらったと思う。質疑応答は、臨機応変に対応する必要があるため、かなりの訓練が必要であると感じた。発表練習の最後に、由良教授からいただいたアドバイスが非常にためになった。日本人にはなかなか分からない英語の微妙なニュアンスや難しい化合物の発音など、丁寧に教えていただいたため、大変勉強になった。

梨花女子大学に到着すると、敷地の広さと施設の充実さに驚いた。留学生や見学にきた高校生が多いのはもちろん、観光客や男性、子供たちも自由に見学したり遊んだり、施設を利用したりする様子を見て、「グローバルでオープンな大学」という印象を受けた。女子大にも関わらず、積極的に外部との交流を持っている点はお茶大も見習うべきだと感じた。本シンポジウムの会場であるサイエンス棟は、学内敷地の奥の方にあった。山を切り拓いて作ったと思われるほど広く、急勾配の多い敷地であったため、移動には苦労した。しかし、門から学生寮までの近道を覚えたり、建物のエレベータを利用したりと、梨大生の日常をかじることができたのは貴重な経験であったと思う。

親睦会では、梨大生の英語力の高さを目の当たりにし、カルチャーショックと同時に刺激も受けた。学生も当然のように英語が話せる、という環境は素晴らしいと思う。元々韓国人に英語を話せる人が多いのは知っていたが、学生みな発音もよく、流暢に話していた。英語で書かれた教材を使っていたり、留学生を多く受け入れていたりと、普段から英語を使うことに慣れている印象を受け、お茶大でも英語での講義や教材を取り入れたらいいのではないかと思った。また、日本のドラマが好きで簡単な日本語を話せる梨大生もいて、グローバルな視野を持った学生が多いと感じた。個人的には梨大生と韓国語でコミュニケーションをとることができて、良い勉強になったし楽しかった。親睦会を通して、グループを組んだ梨大生と仲良くなることができため、この縁を大切にし、今後も交流や情報交換を続けていきたいと思う。

学内ツアーでは、理学部の研究室や測定装置を見学させていただいた。全体的に研究室は広く、実験台のある部屋とデスクのある部屋がきちんと仕切られていたり、全員分のドラフトが用意されていたりと、研究しやすい環境が整っていた。NMRやX線結晶構造解析などといった測定装置に関しては、お茶大の方が充実している印象を受けた。

口頭発表では、生物化学分野が多く、内容的に難しかったが、日本女子大や梨花女子大の興味深い研究を聞くことができて勉強になった。特に、生物実験にマウスではなくメダカを利

用して行っている日本女子大の研究が興味深かった。また、梨大生の発表では、有名誌に掲載された研究をいくつか紹介しており、研究のレベルの高さを感じた。お茶大生は積極的に質問をしていたのが印象的だった。実際に、自分の発表に対して質問してくださった方は2名ともお茶大生だった。自分の発表の反省点は、質疑応答の際、日本語ならば詳しく述べているところを、英語が思い付かないばかりに短く簡単な返答をしてしまったことである。英語力不足と経験不足を痛感した。今後は積極的に英語に触れ、使うことに慣れようと思う。

ポスター発表では、異分野の研究発表を聞くことができて、非常に興味深い経験だった。学部2年生の参加者の研究発表を聞いたが、まだ学会などでの発表経験がないにも関わらず、分かりやすい説明で素晴らしい発表だった。生物分野だったため、分からないことが多く、基本的な質問ばかりしてしまったが、それに対して別途用意した資料などを利用しながら丁寧に説明してくれたため、よく理解することができた。学部の早いうちから、このようなアカデミックな場を経験することは貴重であるし、刺激となっていいと感じた。

今回初めて、観光ではなく学問を目的に外国を訪れた。韓国という近隣の国ではあるが、近くてもやはり日本の大学とは異なることが多いことを実感した。大学の環境や国民性によって研究に個性が出てくるということも感じた。今までお茶大しかなかった自分の世界が、今回のシンポジウムをきっかけにかなり広がったと思う。機会があれば、研究留学をして、さらに自分の視野を広げたいと強く思った。今後も、梨花女子大学とお茶の水女子大学の交流を盛んに続けていくべきだと思う。

参加者名(Name): 野上 栄美子

所 属(Affiliation): 理学専攻化学・生物化学コース(指導教官(supervisor): 矢島 知子) 発 表(Presentation): Synthesis and Crystallographic Study of Perfluoroalkylated Anthracenes

今回、日韓3女子大学交流合同シンポジウムに参加させていただくにあたり、初めて自分の研究を英語で発表するという経験をさせていただきました。自らの研究を英語で発表すること、英語でディスカッションが行えること、また様々な研究者と英語でコミュニケーションが取れることは、自らの研究の幅を広げるだけでなく、人間性を広げる事にも繋がり、公用語である英語を習得することは、研究者として欠かせないことだと思います。しかし、日常で多くの論文に触れているにも関わらず、英語



で話す機会はほとんどなく、英語への苦手意識が拭えないままになっていました。そんな私にとって、今回のシンポジウムは非常に良い機会となりました。発表は不安でしたが、毎週行われる授業で、基本的な人前での発表姿勢をはじめ、基本的な英語のフレーズ、発音、スペルなど細かい部分までご指導いただけたので、少しずつですが英語で発表することへの自信をつけることが出来ました。また、通常の学会とは異なり、分野外の人の前で発表することから、分かりにくい部分や、自分とは異なる視点からの質問がいただけたことは非常に勉強になりました。逆に、私も有機化学という分野だけでなく、物理や生物の方の研究について聴くことが出来たので、単純に興味深く楽しむことが出来ました。また、多くの人の発表を聴けたので、他人の発表と自分の発表を比較し、良いところは真似するということが可能でしたし、一緒に頑張る仲間がいたから達成できた部分も大きかったと思います。

梨花女子大学に着いてからは、その設備の素晴らしさに驚かされっぱなしでした。広大な敷地の中に、コンビニ、カフェ、雑貨屋、映画館など娯楽施設が充実しており、学生で賑わっている様子が印象的でした。また、梨花女子大学の学生とクイズや雑談などで交流を図る場面では、梨花女子大学の学生が積極的に声をかけてくれたこともあり、文化の違いやそれぞれの大学についてなど、英語を使って簡単な会話が出来ただけでなく、様々なことを知ることが出来ました。さらに、化学系の研究室の見学をさせていただきましたが、梨花女子大学の学生の方が様々な研究室の研究内容、また分析機器について説明してくれました。自分の分野外の研究について、またすべての機器について英語でわかりやすく説明してくださり、なおかつ質問にも答えられるそのレベルの高さに驚かされました。また、その研究内容に関してもレベルが高く、今まで知らなかった分野のものもあり、非常に勉強になりました。

2日目の口頭発表では、化学・生物の方で発表させていただきました。やはり梨花女子大学の学生は英語が上手く、発表からディスカッションまでスムーズなやりとりが成されていました。一方で、お茶の水女子大学の学生も、授業のときよりも格段にレベルが上がった発表をしており、本番に向けてしっかり準備をしていた様子がうかがえました。私も授業では覚えきることが出来ていなかった原稿を最低限のレベルとしてしっかり暗記し、本番では多少ミスもありましたが、練習のかいがあってしっかり発表をこなすことが出来ました。しかし、質疑応答の際、質問してくださった先生の英語を聞き取ることが出来ず、軽くパニック状態になってしまいました。お茶大側の先生方の助けもあり、最終的には質問を理解することが出来たのですが、発表が終わった自分は消えてなくなってしまいたい気持ちでした。英語が聴き取れないことは、英語が苦手な私としては想定内のことでした。それならば、聴き取れなかった場

合の対処法などをもっとしっかりチェックしておくべきだったと思いました。また、あらかじめ 質問を予測し、それに対する答えを考えたりしておけば、もう少し落ち着いて対応できたの ではないかと思います。しかし、英語で研究発表することの難しさを身を持って体験できた 非常に良い機会となりました。自らの英語がどの程度のレベルなのか、またどこを重点的に おさえればスムーズなやり取りが可能になるのか少しでも考えることが出来たのはこのような 機会を頂けたからだと思います。

また、学会発表の経験がなかったため、発表する練習をさせていただけただけでも非常に勉強になりました。本シンポジウムの後すぐに国際学会に参加したのですが、英語でコミュニケーションをとることへの抵抗が少なっていることに気が付きました。研究発表の点においては、本シンポジウムでの反省点を完璧に活かせたとは言いにくいですが、今回は学会ですので、日本語で聴かれても答えに詰まってしまうような専門的な質問に英語で答えなければいけない状況に対して、対応できるようになっただけでも本シンポジウムでの経験が活かされているのではないでしょうか。今以上に、研究だけでなく英語も努力する必要があることを十分に感じ、また英語が話せると世界が今とは比較にならないくらい大きくなることを実感しました。今回、このような機会を頂けたこと、またご丁寧な指導をしてくださった由良先生、本当にありがとうございました。この経験を活かし、研究者として更なるレベルアップが出来るよう日々精進したいと思います。

参加者名(Name): 萩生田 綾乃

所 属(Affiliation):理学専攻化学・生物化学コース(指導教官(supervisor):相川 京子)

義(Presentation): Molecular mechanisms of cell surface translocation of Annexin A1

日韓3女子大交流合同シンポジウムに参加し、初めて英語による口頭発表を経験しました。私は中学生のときから英語に対して苦手意識を持っており、日常的に英語の論文を読むことにも抵抗がありました。しかしながら、せっかく大学院に進学したのだから、英語嫌いを少しでも克服して化学を英語で語れるようになりたい、という気持ちで応募しました。授業では、自分の研究内容を3分、5分、8分、12分と段階的に発表練習したことで、背景説明、実験結果、まとめ、と少しずつ発表内容を作成することができました。また、それぞれの領域に対して先生に細かく見てもらうことができたので、英語が苦手な私にとって、臨みやすい授業形態でした。英語以外にも、一般的に学会などで適用する口頭発表の極意なども勉強することができ、とてもためになりました。授業以外でも、要旨作成においては正しい文法で文章を書くことを再度勉強することができ、発表練習においてはわかりやすいシンプルな表現で話すことを心がけるなど、同じ英語での研究内容発表であっても、文章と口頭でそれぞれから勉強することができました。授業外の時間での文章指導、発表指導をしてくださった、指導教員に感謝申し上げます。

韓国での1日目は、韓国の学生さんとの交流タイムとしてお互いの国に関するクイズをする時間があり、仲良くなることができました。韓国の学生さんは日本のことを本当によく知っていて、日本のことを好きでいてくれているというのが伝わってきて、とても嬉しくなりました。一方で私は韓国に関する予備知識を十分に準備していきませんでした。異なる国の人と交流する際に、相手の国のことを勉強していくべきであるという、基本的なことに気づくことができたので、良かったと思います。また、英語を使って交流することの楽しさを感じることができたのも良い経験になりました。さらに、韓国の学生さんの案内でラボツアーに参加しました。私は化学分野のラボを見学させていただきましたが、部屋の構成がお茶大とは全く違っており、一つ一つの部屋が大きく、つながっていることに驚きました。全体的に新しく、近代的なデザインが印象的でした。この写真は ECC と呼ばれる大学の中心施設で、大きな谷のような構造になっています。シンポジウムに参加したメンバーと、ラボツアーで説明してくださった、梨花女子大の学生の方と一緒に撮影したものです。梨花女子大の学生さんはみなさん英語がとても上手で、使い慣れている印象を受けました。説明してもらってもなかなかうまく理解できない部分もありましたが、質問をするととても丁寧に、私たちがわかるように説明

をしてくれ、とてもよく理解できました。また、自然科学を対象に研究している、という部分で共通しているせいか、英語でのコミュニケーションも取りやすかったように感じました。宿泊は大学の寮を利用させていただきましたが、とても起伏の激しい梨花女子大の最奥に位置していたため、往復するのが大変でした。しかし、2日間という短い間でしたが、梨花女子大の学生のように生活する貴重な体験をすることができ、とても有意義に過ごすことができました。



2日目は二つのセッションに分かれて口頭発表をしました。韓国の学生さんはとても流暢な英語を話すので、とても勉強になりましたし、見習わなければならないと感じた一方で、日本の学生の熱心に口頭発表へ取り組む姿勢は自慢できるものだと思いました。事前に授業で練習したように、お互いの発表に質問をしあったり、座長となった学生が積極的に会場を仕切ろうとする姿勢は、とても素晴らしかったと思います。私自身、英語が苦手で、英語をつかって即興で質問することなどできるだろうか、と思っていましたが、失敗してもいいからや

ってみよう、という気持ちで質問をすることができたのはとても良い経験になりました。また、そのように積極的に参加することで、それまでよりもより交流シンポジウムを楽しめるようになった気がしました。自身も口頭発表をしてみて、練習通りに話すことができたことはもちろん、頂いた質問を理解し、自分なりに答える、という経験は日本ではなかなかできないことなので、とても良い経験になりました。また、質問から、このような考え方もあるのか、と思うことができ、充実した発表とすることができました。

最終日である3日目はポスターセッションで、様々な人のポスターを見ることができ、とても 楽しめました。普段参加する専門分野の学会ではだいたい研究内容や背景が近い方が多 いですが、このような交流会では似たような研究をしている方から、全く触れたことがないよう な分野の研究発表も目にすることができ、とても有意義な時間でした。梨花女子大の学生さ んに英語で説明する機会もあり、楽しめた一方で、細かいことを英語で伝えることの難しさを 感じました。また、ともに参加した日本女子大の方ともようやく交流することができ、ためにな りました。

全日程を通して、英語で自分の研究内容を伝えるという貴重な経験をすることができたことに深く感謝します。また、日本女子大、梨花女子大と日本や韓国で、自分と同じように研究活動をしている女子学生と交流することができ、とても刺激を受けました。今後も研究活動に努め、英語を勉強するだけでなく、活用していきたいと思いました。貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。

参加者名(Name): 松脇いずみ

所属(Affiliation):ライフサイエンス専攻 生命科学コース

(指導教官(supervisor):加藤美砂子先生)

発表(Presentation): Environmental impact assessment of *Pseudochoricystis ellipsoidea*

by the model experiment system

今回、日韓3女子大学交流合同シンポジウムに参加させていただいた事は、海外に行くのも初めて、英語で口頭発表をするのも初めてという私にとって、非常に刺激的な経験となりました。

口頭発表に関しては、まず、韓国に行く前に、英語の特訓の授業を受講できた事が良かったです。シンポジウムへの参加が決定した段階では、初めて自分の研究を口頭で発表をする機会をいただき、とても嬉しい気持ちと同時に、英語で口頭発表をするという事がとんでもなく難しい目標に思え、不安な気持ちも感じていました。しかし、授業で、スライドの作り方や発表のコツ、よく使われる英語の表現などを教えていただき、3分、5分、8分、そして本番の12分と少しずつ段階的に



スライドを作り上げていく事ができたので、時間をかけて、無理なく発表内容を練り上げる事が出来ました。授業で初めて発表の順番が回ってきたときには、皆の前で、自分の研究を英語で話すという慣れない体験に緊張しましたが、練習を重ねるうちに少しずつ英語で発表をすることに慣れていくことができました。また、発表の練習をする度に、由良先生が、スライドの作り方や英単語の発音について一人一人丁寧にコメントをしてくださったので、専門用語の発音や英語でのプレゼンテーションの作り方について非常に勉強になりました。授業での練習の結果、本番で 12 分間の発表を無事に終えることができ、とても嬉しい気持ちと達成感を感じました。博士前期課程1年のときにも、国際シンポジウムでポスター発表をした事がありました。しかし、そのときはポスターを作るだけで精一杯で、いざ英語で説明しようとしてみると、いくつかの単語しか言えなかったという恥ずかしい経験をしました。それなので、今回は、その時うまく出来なかった分もしっかり発表してこようと張り切っていました。じっくり時間をかけてスライドを作り、たくさん指導していただいて、自分の研究内容を英語で説明できるようになれたことが、とても嬉しいです。

このシンポジウムでは質疑応答が重視されていましたが、質問された事に対してとっさに 英語で答えることは特に難しく感じました。授業で初めて発表をしたときには、言いたい事 はあるのに、それを英語にできないというもどかしい思いを感じながら無言で立ちつくすとい う有様になってしまいました。これではいけないと思い、いろいろな人に相談し、アドバイス をいただきました。その結果、頭の中にある日本語に相当する言葉を探して無言になってし まうのではなく、なるべく簡単な単語を用いて言いたいことを表現できることが大事なのだと いうことが分かりました。しかし、頭で分かっても、それを実行するのがとても難しかったで す。自由に使いこなすことができる語彙の数が足りないと感じ、語彙力を上げていけるよう意 識していこうと思いましたが、知っている単語の数を多くすればそれでいいというわけでもな く、中学で習うような簡単な単語でもいいから、自分の知っている単語をその場で引き出し てきて文章を組み立てる力が大事なのだということが次第に分かって来ました。そして、そ れには慣れが必要なのだと思います。この点について、今回、シンポジウムに向けて毎回 の授業で質問をすることや答えることの練習を行ない、また、梨花女子大の学生さんたちと 英語で会話をし、英語の発表を聞いているうちに、少しずつ、英語で表現するということに 慣れることができたので、とても良い経験をさせていただいたと思っています。本番では、使 おうと思った単語が適切なのかどうか不安になり、上手に受け答えができたとは言えないで

すが、なんとか言いたい事を伝える事ができたようだったのでほっとしました。このような貴重な体験をさせていただいたので、これで終わりにせず、今後も、この点を課題として取り組んでいきたいと思います。また、英語の講演を聞く機会や、英語で発表する機会があれば、積極的に参加していきたいと思いました。

この3日間には、発表をしたこと以外にもたくさんの刺激を受けてくることができました。今までの自分を正直に振り返ると、自分が住んでいる慣れ親しんだ世界以外に、とても興味を持っていたわけではありませんでした。しかし、この日韓3女子大学交流合同シンポジウムへの参加がきっかけで初めて海外に行き、韓国の人たちと交流し、その文化に触れたことで、自分の知らなかった世界に触れる事はとても楽しい事なのだと知りました。日本と韓国の似ている部分や違う部分を肌で感じ、日本の良さや韓国の良さを考える機会になりました。韓国のことや、まだ知らない世界のことに興味がわき、もっと知りたいと思うようになりました。また、梨花女子大の最先端の設備や研究室の様子を見せていただき、同年代の女子学生のがんばっている姿を見て、私も負けないように研究に取り組もう思いました。

梨花女子大の学生さんたちとお話をしたときには、私たちは韓国語が全然分からず、梨花女子大の学生さんは日本語が全然分からないという状況でも、英語を話す事でコミュニケーションがとれたことが印象に残りました。中高時代から英会話を学ぶ機会は少なくありませんでしたが、自分が海外に行って初めて、共通言語としての英語の意義をこれまでとは比べ物にならないほど、実感しました。自分も globish を使いこなせるようになって、いろいろな国の人の研究を理解し、自分の研究を発信していけるようになりたいと強く思いました。

人前に出て話す事は、これまであまり得意ではありませんでしたが、英語での口頭発表という目標を一つ達成した事で、以前より少し自信が生まれたことや、自分の内面が少し変化したことを感じています。本当に楽しくて、たくさんの刺激を受けることができた、充実した3日間でした。このような体験をさせていただいた事を感謝しています。また、韓国に行っていた3日間だけでなく、毎回の授業で、一緒に参加する人たちの趣味や研究内容を知る事ができ、自分の専門以外の研究内容を聞けた事が、とても新鮮で面白かったです。また、今回のシンポジウムで他の学科の人たちや、他の学年の人たちと仲良くなれた事も、とても大きな収穫でした。ありがとうございました。

最後になりましたが、英語での口頭発表の仕方を、基礎から丁寧に指導してくださり、英語で口頭発表ができるようになるまで鍛えてくださいました由良先生、研究やスライド作りの指導をしてくださいました加藤先生はじめ、お世話になった先生方にこの場をかりて深く感謝申し上げます。また、学生代表の平井さん、山下さんはじめ、一緒にシンポジウムに参加したみなさまに感謝いたします。この経験を糧にして、これからさらに成長していけるよう、一生懸命がんばりたいと思います。

参加者名(Name): 富田千尋

所 属(Affiliation): 人間文化創成科学科 理学専攻 化学、生物化学コース (指導教官(supervisor): 小川温子)

卷 表(Presentation): Expression, purification and folding of recombinant human pancreatic lipase

今回のシンポジウムで初めて自分の研究を英語で発表した。日本での準備期間、韓国での発表を通して多くのことを学んだ。

発表するまでの2ヶ月間、日本で授業を通して発表の仕方を学んだ。授業では、学生がプレゼンテーションをし、質疑応答、先生からのフィードバックをいただく、という形式で進んだ。英語面で苦労したことは勿論だが、他学科の学生にも分かりやすく、正確に伝えることにも苦労した。履修者は学会発表経験が豊富で、スライドの構成、レイアウト、発表の仕方など良いところが



たくさんあり、参考になった。日本語で発表をする時にも生かしていきたいと思う。英語の表現方法についても学ぶことが多かった。また、本番(12分の発表と3分間の質疑応答)に向けて、簡単なトピックから少しずつ専門的なものへ、発表時間も長くなっていった。授業が終わる頃には、シンポジウムへのモチベーションが高まり、英語で研究発表する具体的なイメージをもつことができた。実際の発表も、自信をもって取り組むことができた。

要旨を英語で書く、という経験も非常によい経験となった。研究発表では日常使用する英語とは異なる言い回し、単語を使う。発表で使用する専門用語や言い回しは、この過程を通して身につけることができた。日韓3女子大シンポですぐに発表する、というプレッシャーがあったため、ライティングとスピーキングの相乗効果によって短期間で集中して身につけることができたと思う。

韓国での発表はとても良い経験だった。

まず、初めての韓国だったのでとても楽しかった。周りで聞く言語、人々との交流、景色、食べ物などすべてが新鮮だった。発表場所の梨花女子大学は歴史ある女子大学で自然が豊かで、リラックスできる環境だった。空き時間にお散歩をしていて、とても気持ちがよかった。食べ物がとても美味しかった。梨花女子大の近くのサムギョプサルをまた食べたい。知らない土地に行ったときの美味しいお店の見分け方は、現地の方がたくさんいるか、で見分けるということを一緒に観光したメンバーに教えてもらった。

梨花女子大の学生と交流して感じたことは、英語力と研究へのモチベーションの高さだ。 日常会話から研究のディスカッションまで当たり前のように英語で行っていた。また、ラボツアーでは、活気ある研究室をみたり、熱意ある説明を受けたりし、研究へのモチベーションの高さを感じた。プレゼンテーションでもデータの量と質に圧倒された。一方で、交流会や食事中では、趣味の話や韓国でのおすすめ観光場所などについて話し、とても親しみやすく親切にしていただいた。

発表会では、研究のプレゼンテーションに加えて、司会をする機会に恵まれた。

プレゼンテーションは大きなホールで、緊張感漂う中進行していった。私の発表順番は最後だったため、とても緊張した。参加者のプレゼンテーションは、どれも科学的にも英語的にもレベルが高かった。理解できない場面もあり、科学と英語の理解レベルの未熟さを痛感した。もっと勉強しなくてはならない。その中でも、質疑応答に参加できたことはよかったが、積極的で中身のあるディスカッションができるように努力したい。

プレゼンテーションは、日本での練習を活かして発表することができたと思う。やはり、本番では緊張し時間調整が上手くできず、最後の方が駆け足の発表となってしまった。また、

参加者が生化学以外の方がいることを考慮し、研究の面白さ、意義を伝える努力が足りなかったと感じた。分かりやすさと科学的な正確さを両立したプレゼンテーションには発表者の理解度が高くなければならないと感じた。

司会も非常によい経験であった。会場全体を見渡し、シンポジウムを時間通りに進行させていくことは非常に難しかった。また、3分間という短い時間の中で活気のある質疑応答が行われるようサポートすることが難しかった。会場から質問が出ない場合、聞いている人が理解できてなく発表で重要なポイントを質問したり、科学的に意義のある鋭い質問で会場をもりあげたりできるようになりたいと感じた。

今回のシンポジウムを通して、英語力、科学力の必要性を感じた。また、お茶大の先輩 方、梨花女子大の方々のような技術を身につけたいと、次にどのレベルまで到達したい か?できるか?といった点で具体的なイメージができるようになったこともよかった。このシン ポジウムで得たモチベーションを生かして、今後の学習に反映させていきたいと思う。最後 に、このような貴重な経験ができ本当に感謝しています。先生方、シンポジウムに関わってく ださった方々、参加者の方々、皆に感謝したいです。本当にありがとうございました。 参加者名(Name):中川 結希

所 属(Affiliation): 理学専攻化学生物化学コース(指導教官(supervisor): 益田 祐一 (三宅 亮介))

表 (Presentation): Synthesis of cyclic peptide through metal coordination for forming designable nano-cavity

今回が英語で発表を行う初めての機会でした。英語での研究発表を経験できたことは将来に大きくつながると思っています。私はコミュニケーション力を活かして、専門外の人と専門の人を結んだり、日本と海外を結んだりするような化学者になりたいという目標があります。そのために英語は欠かせません。英語での研究発表と質疑応答を経験することは普段の学校生活の中ではなかなか無いことだと思うので、今回このような機会を経験させていただき感謝しています。



口頭発表は、週1回の授業に参加できなかったので不安がありましたが、先生のお力も借 りながら自分なりに準備を進めました。今回は自分の研究分野の専門外である方がほとん どだと思ったので、研究背景を長めに説明し、なるべく簡潔に、図やイラストを多く用いて伝 わりやすくなるように心がけました。特に原稿は、暗記をしてしまったり、自分自身も理解で きていない英語を話したりするのでは相手に伝わるわけがないと思ったので、暗記ではなく スライドを見ながら自分の言葉で話すように心がけました。発表が終わった後に友達に「面 白そうな研究だね」と言われ様々な質問をしてくれたので、自分の研究のことが少しでも伝 わったと思い嬉しかったです。授業に参加していなかったため、他の参加者の口頭発表は 初めて聞くものがほとんどでした。自己紹介や研究室の紹介などもうまく混ぜて退屈しない ようにしていたり、アニメーションを使ったりするなどの工夫を感じ、興味の持てる聞きやすい 発表が多かったように感じました。質疑応答は、日本語での時でさえ緊張するので英語で 質問をされるということには非常にプレッシャーに感じていました。ひとつは同学年の友達か らの質問だったので、同世代が私の研究を聞くとそういったところに興味がわくのだなという 参考になりました。もうひとつの質問は梨花女子大の先生からの質問でしたが、1度では聞 きとりきることができなかったため質問を繰り返していただきました。2回目では質問を簡単 にしていただけたので質問の意図を汲み取ることができて自分なりに質問に答えることがで き、先生の優しさに感謝しました。質問の意味が分からずに固まってしまうのではなく、聞き 返してみるということが実践できて良かったです。ポスターセッションでは様々な分野の人が 集まっていたこともあって初心者に分かりやすく説明してくれました。分からなくても心苦しく 思うことなく積極的に質問できる雰囲気があったことがとても良かったです。

英語力に関してですが、確かに梨花女子大学の方は英語が堪能でした。単語にもほとんど詰まること無く話していましたし、質疑応答で聞かれた内容も問題なく聞き取っていました。また、発音もほとんど訛りが無く綺麗でした。あまりに梨花女子大の学生のレベルが高いので、韓国は国民のほとんどが英語堪能で、それは教育のお陰なのだろうと思っていました。しかし実際に街に出てみると、英語がそれほど得意ではなさそうな人は意外に多かったのです。そのときに、確かに教育も素晴らしいのだろうけれど梨花女子大の学生の能力や勉強への意欲がすごいのだと気がつきました。英語に加えて日本語が堪能な学生もいた程です。私達は、日本の教育では文法はできるようになっても英語が喋れるようにはならないなどと諦めるのではなく、もう少し自分でも努力することが必要なのかなと感じました。実際、日本の学生も発表はとても上手でしたし、それぞれが何の研究をどのような目的で行っているのか、その研究の面白いところはどこなのかといった魅力は伝わってきました。英語の知識は十分にあるのではないかと思います。あとは質問を聞き取ったり会話をしたりするため

のリスニングの能力と、自分の思ったことを片言でも良いので口に出す勇気、英語を話す経験が備われば、日本の学生も十分な英語力が身に付く可能性はあると思いました。実際、大学 1 年生の時からの付き合いで今回のシンポジウムにも参加した友達は、帰国子女でもないし長期留学もしていませんが今回の口頭発表でネイティブ並みの発音で発表をしましたし、質疑応答もしっかりしていました。英語が好きだという気持ちで学部生の間ずっと努力を続けたそうです。彼女は大学 1 年生の時は正直言って発音や英語力が目立っているとは思っていませんでしたが、5 年努力し続けることでこんなにも成長して結果としてあらわれるのかと衝撃を受けましたし、私も頑張らなくてはという良い刺激をもらいました。

また、梨花女子大学の設備の良さには驚きました。韓国で一番学費が高い大学だと悪いニュースになったと教授が冗談めかしておっしゃっていました。それが韓国の方からしてどの程度高いのかは分かりませんが、この大学で学生生活を送りたいと思えるほどに立派な設備だったので、憧れと目標を持って受験する意欲的な学生は多くいるのだなと思います。梨花女子大が新しい研究棟、実験機器だけでなく、学生の共有スペースである購買や学食、カフェも充実していました。滞在1日目の夜は大学内のカフェやソファーで現地の学生さながらに遅くまで口頭発表練習をしてみたのですが、とても勉強がしやすい環境で心地よかったです。

このような大学の施設の場所や使い方、研究設備などは現地の学生がとても丁寧に説明してくれました。英語の単語を選びながら、一生懸命に説明してくれる姿がとても嬉しかったです。現地の学生は寮のシャトルバスのことや大学周辺のおいしい料理屋さん、電車の乗り換えの仕方など多くのことを快く教えてくれました。また、先生方も私達が快適な生活を送れるように様々なサポートをしてくださいました。多くの先生が「寮の門限が23時だなんてかわいそう、23時からが楽しいのに!」とおっしゃったことには驚きました。他にも交流イベントで話した学生は日本のアニメやドラマが好きだそうで、日本語がとても堪能でした。私の周りにも韓国の歌手が好きで韓国語を勉強している人が多くいるので、日本と韓国の文化が交わっていることを実際に肌で感じることができました。

最後に、今回韓国には初めて行ったのですが、顔が似ていたり、治安が良かったり、食べ物が日本ととても似ていたりするなど、こんなにも日本と似ている韓国に親近感を感じました。その一方で、韓国はどんどん海外へ出ようとしているのに日本はまだ国内だけをみているような印象が残り、私達日本人も外を向いていかなければならないと感じました。他にも今回のシンポジウムでは、英語で自分の思っていることを十分に発言できないもどかしさ、梨花女子大生の意欲、韓国の方々の親切さなど、様々なことが印象に残りました。今回学んだことをこれからも忘れずに、将来に活かしていきたいと思います。

参加者名(Name):藤木 さゆり

所 属(Affiliation): 理学専攻化学・生物化学コース

(指導教官(supervisor): 鷹野 景子)

発 表(Presentation): Quantum Chemical Study on Structures of Boron Clusters

私にとっては初めての韓国、初めての英語での口頭発表、初めての英語でのポスターセッションと、初めてづくしの3日間でした。非常に有意義な3日間を過ごさせていただいたことを感謝いたします。

私は、本シンポジウムに向けてのプレゼン準備の講義が他の授業と被っていため受講することができませんでした。なので、どのような準備をすればよいのか、どの程度自分の研究をかみ砕くべきなのかがわからず混乱していました。しかし、友人や先輩方の助言の元、なんとか準備を進めてきました。準備段階で、異



分野の人を含めた相手へ発表するときには、どのくらい基本部分までさかのぼって説明するべきなのか、わかりやすくするにはどうしたらいいのかを考えなければいけないのだなということを実感しました。

梨花女子大学はとても広く、きれいな大学で驚きました。さすが世界最大級の女子大学だと思いました。ただ、会場となる建物はほぼ山の上に所在しており、スーツケースを持って登るのに苦労しました。

初日には韓国の学生さんとの交流会がありました。韓国の学生さんは皆さんとても親切でした。日本のドラマやアニメが好きで日本語を勉強しているという学生さんと話をしたのですが、日本語がとても上手で驚きました。私も一時期韓国ドラマをよく見ていて、勉強してみようかと思ったことはあるのですが、結局実行に移すことはありませんでした。好きだというだけで通常会話がこなせるくらいに日本語を話すことができるようになってしまうその知識への意欲に刺激を受けました。また、日本が好きだと言ってもらえたのはとても嬉しかったです。

交流会のあとにはラボツアーがありました。化学の建物はちょうど新しく建設しているところで、とてもきれいなラボでした。お茶の水女子大学とは規模が違うこともあり、研究室の分類が非常に細分化されていました。私は実験をしている人間ではないので、機械についてはよくわからないものも多かったのですが、私でもわかるように一生懸命説明をしてくださり、とても楽しかったです。韓国の学生さんが私たちのためにすごく準備をしてきてくださったのだということを感じました。女性研究者というのはどこの国でもやはり少数なので、研究者を目指す同学年の学生さんたちが研究に打ち込む姿には良い刺激を受けました。

2日目は一人12分間の発表でした。日本語の発表では基本的にキーワードを覚えるだけでその場で文章を作って発表をします。しかし、英語ではその場で文章を作る自信がなかったので、原稿を作って覚えて挑みました。12分の英語を覚えるのは辛いものがあり、もっと流暢に英語が出てくるように語学は日頃から勉強しておかなければいけないと痛感しました。 また、質疑応答では、聞かれたことをきちんと理解することができているのかどうか自信が持てず、その結果答えも「これでいいのかな」という思いがありながらの応答になってしまったので、きちんと答えることができなく悔しい思いをしました。完全に質問を理解するまで「もう一度いいですか」と聞き返せばよかっただけなのに、その一言が出なかったのが非常に残念でした。反省点です。

発表全体としては、大学内で聞くのとは全然違う研究が聞けたので楽しかったです。また、発表の始めのうちはあまり質問も出なかったのですが、後半になるにつれてだんだん学生からの質問が増えてきてすごいなと思いました。私もなにか質問をしようと思い、必死に聞いたのですが、結局最後まで一度も質問せずに終わってしまい、反省しています。発表を

聞いてみて、自分が特に生物分野に全然知識がないということを思い知りました。幅広く知識を増やしていくことも大切だと思うので、これからは生物分野についても意欲的に学んでいこうと感じました。

最終日のポスター発表は非常に面白かったです。学会などの発表よりも人が少なかったので発表者の方と距離が近く、細部まで質問をして話を聞くことができました。また、化学のみならず様々な分野の発表があったので、今まで全く触れたことのないような分野の話を聞くことができました。時間が足りないと思うくらい充実したポスターセッションだったと思います。

全体を通して、3大学全ての大学からの参加学生さん皆さんが語学・研究に打ち込んでいる姿を間近で見ることができ、私も負けていられないなと思いました。特にチェアパーソンを務めた同級生の素晴らしい司会ぶりには感動しました。本当にとても良い刺激を受けることができた3日間でした。

自身の語学力の低さ、コミュニケーション能力の低さを実感したので、今後の学習のモチベーションが大きく上がりました。語学も研究も、これまで以上に真摯に打ち込んでいこうと思います。

最終日の午後にはソウルの街の観光もすることができました。韓国は街のどこで出会う人も本当に親切で、また食べ物も美味しく、初めての韓国はとても楽しかったです。韓国が大好きになったので、ぜひまたいつか行きたいと思いました。

最後に、由良先生を始めとする、事前準備から私たちのために動いてくださった先生方、また、私たちを問題なくスムーズに受け入れ、食事関係から寮まで全ての手配をしてくださった梨花女子大学の先生方、学生の方々に心から感謝申し上げます。とても貴重な体験をすることができました。本当にどうもありがとうございました。

参加者名(Name): 三橋 佳奈

Interaction

英語で様々な分野の科学的な話が理解できるようになることと、専門的なことを専門外の人、国外の人にも分かりやすく伝えることを目標に、今回のシンポジウムに参加しました。

事前授業では、英語によるプレゼンテーションの練習をしました。短時間で、初めて聞く話を理解してもらうには、直感的にわかることが大事だと思ったので、イラストやアニメーションを使って、プレゼンテーションのスライドを準備しました。しかし、実際に発表をしてみる



と、自分で思ったよりもこちらの意図が相手に伝わっていないことが多々あり、客観的に、自分の発表を見直すことの重要性を再認識しました。英語で質疑応答をする練習もしましたが、伝えたい内容を表す単語が出てこないことがあり、話している英語の文法もめちゃくちゃで、プレゼンテーションの練習の前に単語や文法、イディオムを覚えるといった地道な英語の勉強も重要だと思いました。この授業には様々な分野の人が参加しているので、毎週普段触れることのないテーマの話を聞けるのが新鮮で楽しかったです。皆、それぞれに発表に工夫を加えていたので、聞いているだけでも勉強になりました。分野外の研究に触れるせっかくのチャンスだったのだから、もっと理解を深められたら良かったと思います。

韓国でのシンポジウムでは、練習のかいがあって落ち着いて発表できました。質問の受け答えは、相変わらずかたことでしたが出来うる限りの英語で答えました。シンポジウム全体の様子としては、韓国側の発表は英語も流暢で、内容も論文として雑誌に掲載されるレベルのもので素晴らしかったのですが、発表者の人数は少ないと感じました。海外の学会と日程が重なったことが発表者の少なかった理由のようです。また、韓国側の発表者は自分の出番の前だけ会場に居るようで、発表者としても、聞き手としても質疑応答には積極的ではなかったので、少々物足りなく感じました。

写真の焼き肉はサムギョプサルです。韓国の学生さんから教わったお勧めのお店に、日本の友人に連れて行ってもらいました。日本の焼き肉とは異なっていて、油っぽくなく柔らかいお肉でした。小皿に入ったサンチュや大根の漬物のようなもの、辛い味付けの菜っ葉、甘辛いみそなどが食卓に並べられ、それらを自由に組み合わせて肉を包んで食べました。大変に美味でした。おいしいものもたくさんありましたし、かわいいお店もたくさんありました。お隣の国なので共感するような部分もあり、感覚が違うところもありました。人の外見や街の感じは似ているけど、違う文化圏なのだと感じました。たくさんの発見がありました。ぜひもう一度韓国に行きたい、韓国のことをもっとよく知りたいと思いました。

韓国の学生たちは英語だけでなく、日本語まで話すのだから驚きました。問えば、日本のドラマやアニメを先取りするために日本語を勉強したというのです。素晴らしい学習意欲です。繁華街、明洞に行けば、日本人向けの道案内係がいたし、どの店にも日本語や中国語を話せる店員がいました。チラシ配りの兄さんも日本語で話しかけてきました。彼らのしつこいほどの商売っ気には圧倒されました。世界を相手に商売しようと思ったら、このぐらいの押しと柔軟性が必要だろうと感じました。日本は技術的には良いものを持っているのに、海外のテレビの市場確保において韓国や中国に出遅れたという話を以前耳にしたことがあるのですが、韓国に実際に行ってみて納得がいきました。

今までの私は、国立大学の中でも、それなりに名のあるお茶の水女子大学に在学しているという事実に満足して、井の中の蛙よろしく、のんべんだらりと学生時代を浪費していたわ

けですが、自分がいかに狭い世界で生活していたかを認識し、これではいけないと気がつきました。このシンポジウムに参加することで、多くの刺激を受けて、たくさんのエネルギーをもらいました。

指導してくださった由良先生、梨花女子大学の先生方、企画、運営してくれた日韓の学生さんたち、その他運営に携わった全ての方々、支えて下さった人々に感謝しています。 この機会を与えて下さってありがとうございます。 参加者名(Name): 渡邊 隆子

た。

所 属(Affiliation):理学専攻 物理科学領域 (指導教官(supervisor):出口 哲生)

表 (Presentation) : Some explicit expressions for the form factors of Heisenberg XXZ spin-chain

今回初めて自分の研究を英語で口頭発表する機会を得た。

5月から「ライフサイエンス演習」という授業で英語での口頭発表をする練習をさせていただいた。実際に何度かスライドを使って本番さながらの練習をすることが出来た。これから一研究者として生きていこうとしている私にはこの練習はとても有意義なものだった。反省点は、もう少し下準備をしてやれるだけのことをやって練習に臨みたかったことだ。何となくこなしていたため、自分の力の限界が分からず指摘して頂いたことの中には事前に準備出来るであろうこともたくさんあった。別の機会に生かしたい。



7月16日(月)、ついに梨花女子大学に到着。とても敷地が広く傾斜が多い大学だ。 険しい道を歩くこと20分。宿泊するDormitoryに到着。学生寮への滞在も初めての経験で 新鮮だった。そしてDormitoryに荷物を置いてシンポジウム会場へ移動した。 初めに"social event"というものがあった。日本人と梨花女子大学の学生がグループを作り、 ヒントを出し合いながら交互にクイズを出しあった。クイズ自体は比較的ポピュラーなものだったが、うまくヒントを出すのがなかなか難しくて笑いが絶えない楽しい時間だった。また、そ の間に友達も出来て日本のことや韓国のことなどいろいろ積極的に英語で話すことが出来

そしていよいよ、発表当日。事前に発表の練習を積み重ねてきたおかげか、皆程よく緊張しつつもリラックスした様子だった。私はシンポジウムぎりぎりまで出来る限り伝えたいことが伝わるように分野外の聞き手の立場になってスライドの修正をして、本番に臨んだ。特に私の研究内容は難しい数学の概念や複雑な数式が多いため、「研究手法・研究結果・結果はどのように嬉しいか(新しい点はどこか)」について専門用語を極力減らして説明するように心がはた

自分の名前が呼ばれ、いよいよ檀上へ。私はもともととても緊張しやすいのだが、思いのほか緊張はしていなかった。これも事前の練習のおかげだと感じた。原稿ではなく、スライドや聴衆を見て臨機応変に英語を話すことが出来た。私は中学生の時にイギリスとアメリカの学校に通学した経験があるものの、「ライフサイエンス演習」の授業では英語を話す感覚をほとんど忘れていることを痛感していた。しかし、韓国滞在中は積極的に英語を話すことが出来て少しずつ「英語を話す」ことに慣れてきた。

そして韓国滞在最終日。午前中はポスターセッションがあった。口頭発表の際に用いたスライドにさらに定義等を詳細に書いたものを用意した。何人かの方が来てくださり、口頭発表でうまく伝わらなかった部分が明らかになった。ポスターセッションの方が時間があり、詳しく説明することが出来るので、同じ内容をポスターセッションでも発表することはとても意味のあることだと感じた。

7月18日の最終日は午前でシンポジウムは終了。お昼以降は"reception"で知り合った梨花女子大学の学生さんとソウル市内を観光した。数学科の学生さんだった。私は学部まで数学科に在籍していたので、何かと話が盛り上がってとても楽しかった。数学の話も英語で話すことが出来た。私の学部生時代よりもよく勉強をしていて豊富な知識を持っている学生さんだった。また、「シンポジウムにはなぜ数学科の学生がいないのか」と質問された。数学科の学生さんがシンポジウムに参加していないことをとても不思議に感じているとのことだっ

たので、私が参加したことは意義があったかもしれないと感じた。今後、このシンポジウムへ数学科の学生さんの参加が増えることを願わずにはいられなかった。今回の韓国訪問では良かった点と改善すべき点(or されるべき点)が分かった。

練習の時から痛感したことは何より、やはり大きな声ではきはきと話すことであった。口頭発表本番ではマイクがあったため会場全体に声が聞こえたようだったが、どんな発表でもマイクがあるとは限らない。また、会話の際に声が小さいことは聞き手を不快にさせたり快活ではない印象を与えたりしてしまうだろう。他には、聴衆を見て話すことだ。発表本番ではある程度実践できたのだが、まだまだ改善の余地があると感じた。基本的だが、「話すこと」はコミュニケーションのひとつであり伝えたいことが相手にきちんと伝わるべきである。出来れば相手に「聞いてよかった。もっと聞きたい。」と良い印象を与えるべきだろう。

このシンポジウムに対して改善されて欲しい点は、シンポジウムへの梨花女子大学の学生さんの参加人数が増えること、数学科の学生さんの参加が増えることである。開催時期が7月ということもあり、夏季休業中だったのかもしれない。なかなか日程調整が難しいとは思うが、出来れば両大学の学生さんが多く参加できる時期にシンポジウムが開催されると尚良いのでは、と感じた。このような大学間の交流イベントは、自身の研究のことや日常会話を積極的に英語で話す良い機会だと思う。通常の留学よりも比較的気軽に参加できるのも良いと感じた。もし日程等が合えば、また来年も参加して英語の力やコミュニケーション力をもっともっと磨きたいと思う。最後に、お世話になった先生方やシンポジウムの準備を進め、私たちお茶大生を温かく迎えてくれた梨花女子大学の学生さんや先生方に心から感謝したい。

参加者名(Name): 菅 悠美

所 属(Affiliation):理学専攻 物理科学コース (指導教官(supervisor): 浜谷 望)

卷 表(Presentation): Correlation between Membrane Composition and Morphological Change of a Giant Vesicle-based Model Protocell

今回、初めて英語で自分の研究を発表する機会を持つことが出来ました。学部4年時から、これまで取り組んで来た研究を英語でまとめて発表することは、私にとって大きな節目となる機会となりました。と同時に、研究に対するモチベーションをさらに高める貴重な機会となりました。

本シンポジウム参加に向けて受講していた授業を通して、他分野を専門とする人の前で、 英語で自らの研究内容を話す機会を得られたことは、私に取って大変良い経験となりました。自分自身の英語力の低さを思い知らされる共に、他の学生から刺激を受け、"英語で伝える"ことへの意識を高める良い機会となりました。2ヶ月半の週1回の演習授業でしたが、発表の練習というだけでなく一緒に参加するメンバーの発表や他分野のバックグラウンドを知ることが出来たのも良かったです。英語のプレゼンテーションの進め方や発音など、由良先生には大変ご丁寧にご指導頂きました。感謝致します。

発表資料の作成に関しては、いかに簡潔かつ誤解のない表現にするかということを常に 意識しながら行いました。スライドにおいては、専門の異なる人でもイメージしやすい様、極 力文章を避け、導入部分に図式を用いたり、視覚的にわかりやすい結果を挿入したりと工 夫しました。原稿も自分の英語能力に見合う簡単な英語を使用し、何度も推敲を重ねまし た。また、発表を通して先生から頂いた助言や質問をスライドや原稿にフィードバックさせて 次の発表に臨む様にしました。どのようにしたら聴いているひとの興味・関心を引き出すこと が出来るのかを考えながら発表資料を作成していくことが、非常に難しかった様に思いま す。普段の学会とは違った視点で発表資料の作成にあたる過程で、自らの研究内容を見 つめ直す機会ともなりました。このように、様々な分野をバックグラウンドとする方の前で発表 をする際には、同じ分野の人だけでなく、他分野の人から意見を取り入れながら発表資料 を作成していくことが、重要ではないか感じました。

発表練習に関しては、特に以下の2点を心掛けながら取り組みました。1. 原稿を覚え、発表練習では原稿は見ない。2. 相手の目を見て、大きな声ではっきりと英語を発音する。初めは、英語の原稿を覚えることでさえ時間と労力を要しました。研究を進めながら、同時に英語での発表の練習行うことは思っていた以上に大変でした。しかし、「英語で自分の研究を発表してみたい、自分が英語を使ってどこまで出来るのか試してみ



たい」という思いから、最後まで諦めずにやり遂げることが出来ました。授業の回数を重ねごとに、英語で発表することへの抵抗もなくなり、自信をもって発表が出来る様になった様に感じます。最終的に、相手の目を見て、堂々と発表できるようになったことは、大きな進歩であると思います。今後は、発表後の質問に関しても、英語で適切に答えることが出来る様、さらに英語力を伸ばして行きたいと思います。

本番の発表を通して、梨花女子大の学生の意識やレベルの高さを肌で感じました。また、 梨花女子大学の構内は大変広く、施設の素晴らしさも体感することが出来ました。口頭発 表、ポスター発表での梨花女子大学の学生は皆さんとても英語が堪能で驚くばかりでした。 初日の日韓交流会においても、大変積極的で、同じ学生として刺激を受けました。交流会 のときに梨花女子大の学生さんに学年を聞くと、学部の3年生や4年生でした。将来の夢は 『科学者』と胸を張って答える姿に大変刺激を受けました。短期間に素晴らしい研究をし、 それを流暢な英語で発表しており、私たちも頑張らなければいけないと刺激を受けました。 今回のシンポジウムを通して、英語で発表するという機会を得るだけでなく、韓国の学生との交流する機会を持つことができ、学生最後に大変貴重な経験をすることが出来ました。また、韓国の学生のレベルの高さに刺激を受け、今後研究だけでなく、語学にももっと力を入れて取り組んで行きたいと思います。そして、自分の意識を常に高く保ち、社会を背負って行ける女性になりたいと強く思いました。また、これを機に、常に向上心を持って色々なことに挑戦して行きたいです。

参加者名(Name): 菅江 祥子

所 属(Affiliation):理学専攻物理科学コース(指導教官(supervisor):出口 哲生)

亲 表(Presentation): Glassy dynamics of ultrasoft colloidal particles

プレゼンに苦手意識を持っている私にとって、英語で口頭発表という本シンポジウムは言語の壁も合わさった、大きな挑戦でした。準備する上で非常に効果的だったのは先立って行われた、週に一度の演習授業です。三分、五分、八分と、本番の十二分に向けて時間を延ばしながら発表練習を行う中で、人前に立つ事にも徐々に慣れ、落ち着いて臨めるようになりました。内容に関しては、異分野の人にもできるだけ分かりやすく、自分の研究を伝える事を心がけました。特に重視したのは導入の部分です。身近な現象を絵で示



し、イメージしてもらいやすくなるようにしたり、重要な語句はくどいほど繰り返し口にしたりと工夫をしました。抽象的でありながら、さまざまな自然現象・社会現象と結びついている、物理の魅力が少しでも伝わっていれば幸いです。いずれにせよ、自分の研究を一歩引いて見つめ、その位置付けを問い直す、良い機会となりました。今後も「自分の研究を上手く伝える」訓練を積みたいと思います。また授業を通じて、他の専攻の人の研究内容に触れられた事が良かったです。専門分野にどっぷりつかる普段の研究生活では味わえない経験で、新鮮でした。

本シンポジウムを通して改めて突きつけられた課題はやはり英語力です。じっくり時間をかけて準備した発表内容を話す事はできても、受けた質問に対して返答できなかったり、梨花女子大の学生さんとの交流会で気持ちを言葉で表現できなかったりと、何度となく悔しい思いをしました。振り返ってみればあのときはこう言えばよかったと分かるのですが、即座の反応、すなわち会話ができないのです。一緒に参加したメンバーの中にはそのスキルに長けた人が大勢いて、とても格好良いと思いました。国際化が急速に進む時代に社会に出る身として、英語は避けられない、と以前は半ば義務感にかられていたのですが、そのような人の姿を目の当たりにし、私も話せるようになりたい、と心から思いました。この気持ちを忘れず、身近な友達を募って英語に触れる機会を継続して持ちたい、外国の方と交流できる機会があれば積極的にチャレンジしたいと考えています。

今回の渡航は私にとって二度目の海外経験でした。二時間で行く事ができる手軽さが良かったです。そして街のあちこちに日本語表示の看板があり、あまり外国に来ているというかんじがしませんでした。学問の舞台である梨花女子大学は、非常に広大かつ立派な出で立ちで感心しました。設備も充実しておりうらやましく思う反面、急斜面を行き来しらければならないキャンパス生活はたった三日でも身体的にきつく、私はこじんまりした本学の学生で良かったと思います。大学紹介ビデオによると梨大は理工系の総合大学です。生命科学や工学、薬学などの領域への力の入れようは韓国の急速な経済成長の源泉なのでしょう。社会の利益に直結しない自然科学の分野の人気は比較的劣るという話からも、その風潮が分かります。その国の置かれた事情を背景に抱えて学問のトレンドが生まれるのだと実感しました。数十年後には物理学の世界的権威が韓国から登場するか、今後の変遷に注目したいと思います。

私は本シンポジウムをきっかけに韓国への意識が高まりましたが、同様に(もしくはより早い段階から)、韓国の学生さんも日本を意識してくれているという事を知り嬉しかったです。 私の話した学生さんはすでに日本へ行った事があるという学生さんや、中には日本語を少し勉強していると言って披露してくれる学生さんもいました。私は今回が最初で最後のチャンスでしたが、今後も本シンポジウムを続けてほしいです。今回一緒に参加した学部学生の 方のモチベーションの高さにはとても感心しました。彼女らが参加回数を重ね、今後の日韓 交流を牽引してくれるであろうと、頼もしく思いました。

最後になりましたが、本シンポジウムの取り仕切ってくださった由良先生その他引率してくださった先生、学生代表の平井さん・山下さん、そして発表に向けて共に頑張った参加者の皆さんには感謝の気持ちでいっぱいです。たくさんの刺激を受けた、貴重な経験となりました。本当にありがとうございました。

参加者名(Name): 平井 弘実

所 属(Affiliation): 理学専攻情報科学コース (指導教官(supervisor): 小口 正人)

轰 (Presentation): A proposal on Transmission-Control Middleware on Android Terminal in a Wireless LAN Environment

私は昨年度のシンポジウムに参加し、多くを学ぶことができましたが、一方で反省も多く、より精進したいと考え二度目のシンポジウムに参加しました。前年は、サブリーダーとして、リーダーを務める先輩のサポートをしていたのですが、今年は自分が中心となって動かなくてはならないということもあり、昨年以上に緊張は高まりました。また今年は自分が、修士2年ということもあり、定例の研究会に加え、国際学会への論文投稿や発表のための渡航なども日韓シンポジウムの準備期間と重なり、てんやわんやの準備となりました。その中で、日本語と英語が入り交じりながらも、頭を切り替えることで迅速に準備をこなしていく必要にかられ、準備のために梨花女大学の代表学生とのメールのやり取りは、いつの間にか私の中で日本語のメールを返すのとほとんど変わらない作業になっていました。今年の代表学生もいかにも梨花女子大らしい、気品と博識を兼ね揃えた優秀な人物であり、やり取りはスムーズに行うことができました。彼女とは、二カ月近くに渡り、交流会の計画を練ることができたこと、また当日は、同世代の普通の女子学生として、ガールズトークに盛り上がれたことで、交友関係を築くことができました。このような人脈をこれからも大事にしていきたいと思います。

交流会は、メインイベントである研究発表を盛り上がらせるためには、必要不可欠 なイベントであることを昨年のシンポジウムで学び、今年もうまく盛り上げたいとい う思いがありました。しかし、開会式の先生方の挨拶が終わっても一向に学生は会場 に集まらず、とても心配になりました。梨花女子大の学生に確認したところ、交流会 については、アナウンスが行き届いていなかったそうです。このような事があっても 孫先生及び、代表学生がすぐに研究室を回って学生を集めて来て下さり、開始直前に は、日本側の学生と同数程度の梨花女子大生が集まりました。交流会は、昨年と同様 に各大学の学校紹介とクイズゲームを行いました。日本側の学生と韓国側の学生が少 数でチームを作り、日本語で単語を出題し、日本側の学生はヒントを出し、韓国側の 学生が選択肢の中から答えを考える、また次には韓国語で出題し、日本側の学生が答 えるというシンプルなゲームです。昨年のシンポジウムでは、梨花女子大生の国際的 教養が高く、ヒントを出さずとも日本側の出題にすぐに答えてしまうという問題があ ったため、今年度は、難易度を上げました。参加した梨花女子大学の学生は、理系学 生であるにも関わらず、流暢な英語や日本語を話す学生もいて、国際意識の高さを感 じました。しかし、日本側も積極的にコミュニケーションを取ろうと取り組んでいる 学生も多く見受けられ、クイズゲームが終わった後の自由時間も各々の話題に盛り上 がっているようでした。両国の参加学生に良い関係ができたと思うと、一生懸命準備 をした甲斐を感じました。

研究発表については、今年もライフサイエンス演習の授業を通して、英語プレゼンを練習する機会があったため、当日も順調に英語で発表をすることができました。また私は、今年初めて座長を担当することになったのですが、リハーサルがあったことで座長の役割についても事前に確認することができて良かったです。今年度は、梨花女子大学の教授がシンポジウムに積極的に参加して頂けたことで、質問に詰まることはほとんどありませんでした。しかし、自分から他分野の研究発表に質問がほとんどできなかったことが今回の反省点です。やはり今年も学生からの質問があまり出ないといった様子であり、座長でないセッションにおいても、事前に要旨を確認し、内容を頭に入れておくべきだったと感じました。

また、今年度はコンピュータサイエンスを専攻する学生も当シンポジウムに加わったと聞いていましたが、実質参加した情報分野の学生は、あまり多くはなかったようでした。ただし、物理を専攻している学生が、プログラミングや電子デバイスに手を出しているということもあり、梨花女子大の研究の深さと幅広さを感じました。ポスター発表の時は、昨年の反省を活かし、自分のポスターを聞きに来る学生を待っているだけでなく、積極的に発表を聞きに行き、その後に自分の発表も聞いてもらえるようにしました。このようにした結果、昨年よりも多くの学生との交流に成功し、英語で研究発表を行うことに対する抵抗感を払拭することができました。

参加者名(Name):山下 晓香

所 属(Affiliation): 理学専攻情報科学コース(指導教官(supervisor): 小口 正人)

亲 表(Presentation): An Evaluation of Correlation between Difference of WLAN Quality and Results of Lifelog Analysis Application

私は、今回、第3回日韓3女子大学交流合同シンポジウムに学生代表として参加し、自身の研究内容について英語でプレゼンテーション、及び、ポスター発表を行う機会を得た。今回のシンポジウムは昨年に引き続き、2回目の参加であった。今回のシンポジウムにおける私の目標は、自身の研究内容を海外の人に紹介することによって、日本以外の人の意見を得たいということと、自身の今の英語力を試し、上達させる機会とする事であった。更に、今回は、学生代表としての参加という事で、日本と韓国の学生が交流を深め、楽しんでもらえるようなソーシャルイベントを企画する事が大きな目標でもあった。

1日目は、午前中の10時頃に韓国に到着し、11時頃に、梨花女子大学のキャンパスに 到着した。梨花女子大学のキャンパスは、お茶の水女子大学のキャンパスに比べ、とて も広大であった。キャンパス内にある会場に到着すると、昼食を済ませ、オープニング セレモニーとして、韓国側の先生と日本女子大学の先生の挨拶が行われた。

先生がたの挨拶の後は、日本と韓国の学生代表同士が企画したソーシャルイベントを 行った。まずは、日本女子大学、お茶の水女子大学、梨花女子大学をそれぞれの学校紹 介が行われた。ソーシャルイベントは、韓国と日本の学生の交流の場として設けられて いるので、日本と韓国の学生がグループを作って協力してクイズに挑戦する形式のもの を行った。日本と韓国の学生が2人ずつグループになってチームを作り、英語を用いて、 相手に、スライドに映し出されているお題(日本や韓国の文化)を説明するというもの であった。今回のソーシャルイベントの内容がクイズであるという点は、昨年のシンポ ジウムと同じであったが、昨年は、ほとんどの韓国の学生がひらがなを読めたため、日 本側のクイズが韓国側の学生にとって簡単過ぎであった点の反省を活かし、日本側のク イズの難易度を上げたスライドを作成した。日本側と韓国側の生徒が2人ずつグループ になって、スライドの単語の意味を英語で説明するので、お互いの英語力の上達につな がり、更に、お互いに交流をする良い場となった。ソーシャルイベントの後、情報科学 科の後輩に、クイズが好評という感想をいただいたので、好評であったようでうれしか った。クイズタイムが終了した後は、時間があったので、フリータイムとした。このフ リータイムの時間を利用して、日本側と韓国側の生徒が英語でお互いの学校生活などに ついて、交流する事ができたので、有意義なソーシャルイベントタイムを企画する事が できたと思う。

ソーシャルイベントの後は、梨花女子大学のキャンパスツアーに参加した。私が専攻 している情報科学の分野は無かったので、物理の研究棟を見学し、物理分野を専攻して いる生徒の研究紹介を聞いた。宇宙における光線についての研究が興味深く、また、実 験環境と研究環境が非常に充実していたので、羨ましいと思った。

2日目は、梨花女子大学でそれぞれの研究についてのプレゼンテーションが行われた。

私の発表時間は午後であったため、午前中は、 会場で梨花女子大学や日本女子大学の学生やお 茶の水女子大学の他の学生のプレゼンテーショ ンを聞いて過ごした。普段、情報科学の分野以 外の化学や物理や生物の分野の研究内容につい て聞くことはあまり無かったので、他の分野の 人がどんな研究をしているのかを知る良い機会



になった。自分の専門分野である情報科学系の研究以外の分野の発表内容に対しては知識がほとんどなかったため、理解するのが難しかったが、数学、化学、生物、物理、情報科学と専攻している分野は異なっていても、これらの科目は全て自然科学という1つの分野なので、たとえ、自身の専攻が情報科学であっても、数学や化学、生物、物理の研究内容についても理解できるようになる努力をしたいと思った。自身の発表では、情報科学を専攻していない人にも自分の研究内容を少しでも詳しく理解できるように説明するように努めた。梨花女子大学の先生から、貴重な指摘をいただき、3日目のポスター発表の時間にも、議論する事ができたので、とても有意義な研究発表の場であったと思う。

3日目はポスター発表とソウル観光をした。ポスター発表の際に、短い時間で要点を 上手く説明する事ができなかったので、ポスター発表の仕方を身につける必要があると 思った。帰りのフライトまで自由時間では、ソウル駅周辺でショッピングを楽しんだ。

この3日間の日韓3女子大学交流合同シンポジウムを通して、私は、実践的に英語で韓国の学生と会話をする事ができ、改善すべき点は多くあるものの、自分の英語に自信を持つ事ができた。

最後に、今回のシンポジウムを計画し、指導してくださった先生がたや共に企画を考えて下さった代表生徒の皆様に心から感謝の気持ちを申し上げたく、謝辞にかえさせていただきます。

参加者名: 高橋 沙綾

所 属: 理学専攻 物理化学コース(指導教官: 森川 雅博)

発 表: Stellar Pulsations from Synchronized Elements

本シンポジウムは私にとってはじめて英語で研究発表をする機会でした。今回他学科の学生が多く、自分の研究をどのように説明すれば分かりやすいか非常に悩みました。私は星の研究をしていますが、自然現象に多く見られる同期現象にも少し関係しています。そのため、生命とのアナロジーを強調し、星も私たちと同じように生きているのだというメッセージを込めたストーリーを作りました。ストーリーをしっかり考えたことで、梨花女子大学の先生方には面白い発表だったと言っていただきました。しかし、学生の方には内容が難しく理解できなかった、と言われました。完全に理解してもらうことは難しいと思いますが、より分かりやすい発表をするにあたって反省は2点あります。一つは話すスピードが少し速くなってしまったことです。ただでさえ専門が違い、内容を理解することが難しいうえに、慣れない英語での発表だったため、内容を把握する時間をしっかりとることが大切だと感じました。もう一つは単語が分かりづらかったことが挙げられるのではないかと思います。私は普段から論文でよく見かけている英単語でも、専門が違うとあまりなじみがなく、すぐには意味が出てこないものもあるのだと感じました。あまりない機会ですが、専門外の方にお話しする場合はこのようなことにも気をつける必要があると実感しました。

また、学生の方とお話しする機会があり、普段の生活について聞いてみると日本の学生と似た部分が多く、親しみを感じました。例えば、アルバイトは家庭教師やカフェが人気だとか、ショッピングが好きだとか、朝ごはんのおかずは卵とウインナーだとか。しかし、韓国の文化や歴史を知ることはあまりできませんでした。その理由としては、私の準備不足があると思います。レクリエーションのクイズの後、フリートークの時間がありましたが、一時間話題を探すことに苦労しました。学校生活や趣味の話でだけでなく、互いの文化について聞くことができればさらに充実したのではないかと思います。

今回の韓国訪問にあたり韓国のことを少し調べてみようと思い、インターネットで検索したところ、日本と韓国の関係やその歴史的な背景についてたくさんの記事を見つけ、それまでまったく興味を持っていなかったことに深く反省しました。もちろん韓国で、日本をどう思うか、などという質問をするつもりはありません。しかし、互いの文化を少しでも知り興味を持つことをしなければ、より深い関係を築くことはできないと今回感じました。特に重要だと考えたことは、私がもっと日本について知っていかなければならないということです。日本の文化を語ることができれば、日本にはこの様な文化があるけれども似たようなものはありますか、など様々な切り口でより深く韓国について知ることができたのではないかと思います。よく、海外で通用する人は、英語が話せる人ではなく自国の歴史や文化を語れる人だ、ということを聞きますが、まったくその通りだと実感しました。今回の訪問がきっかけで日本についてもっと知りたいという興味が私の中でとても大きくなりました。

また研究の話題も、より深く互いを知ることのできるツールだと感じました。面白い研究をしている人とは話してみたいと思うし、研究に対する姿勢や考え方から、相手を知ることができると思います。特に専門が近い人同士で、互いにその周辺の知識が豊富にあれば、研究の話で盛り上がることができます。自分のアイデンティティの一部として研究に真剣に取り組み、積極的に発信していくことで国内外間わず多くの人と議論し、新たな知見をどんどん得ていきたいです。

歴史や文化、研究、それぞれ豊富な話題のネタがあることで、海外の方とも充実したコミュニケーションをとることができ、自分の可能性が広がるのではないかと思いました。本シンポジウムはこのようなことに気付くきっかけとなり、私にとって非常

に有意義な体験となりました。今後もこのような機会があれば積極的に参加したいと思います。そのとき、今回よりもさらに充実した交流ができるように、今自分ができることを考え、 積極的に行動していきたいです。 参加者名(Name):八反田 香莉

所 属(Affiliation): 理学専攻情報科学コース(指導教官(supervisor): 伊藤 貴之)

秦 表(Presentation): A Pressure and Flow Representation for EFD/CFD Integrated Visualization

今回日韓3女子大学交流合同シンポジウムに参加できたことは、私にとってとても有意義であった。私は今回のシンポジウムに参加する1週間ほど前に初めての国際学会へ参加し、初めて英語での登壇発表を行った。よって、今回のシンポジウムでの発表は2回目であった。英語での登壇発表に慣れるためのよい経験となったのと、初めてのポスター発表を行い、互いの研究について議論を交わすよい機会であった。また、私は韓国へ訪れるのが初めてであったため、韓国の文化に触れ、韓国の学生たちと話す機会を得ることができたことは、とても大きな収穫であったと思う。



まず梨花女子大に到着して驚いたのは、キャンパスがとても広大だったことである。校門入ってすぐのところに、とても近代的で大きな学食、図書館、カフェなどが入っている建物や、講堂のような建物があった。建物の中は様々なお店があり、とても充実していた。韓国へ訪問する前に梨花女子大はとても広大なキャンパスであると聞いていたのだが、想像をはるかに上回る広さだったので、とても驚いた。そして、坂道がとてもきつかった。きつい坂道をずっと登っていくと、我々が発表を行った science building と宿泊した学生寮があった。

一日目は、到着した後、韓国との学生との交流イベントがあった。韓国の学生2名、日本の学生4名でグループを組み、お互いの国についてのクイズに答えるという形式だった。このイベントは韓国のことを少しでも知ることができたことと、それ以上に韓国の学生と話すことができたことがとても楽しかったように思う。このとき話した韓国の学生は、とても英語が上手だった。私は英語があまり得意ではないので、英語や韓国語を教えてもらった。それだけでなく、韓国のおすすめのお店や化粧品、観光地を教えてもらった。韓国の学生と1時間ほど話した後、研究室見学へと行った。私は物理の研究室見学に行ったのだが、他大学・他分野の研究室へと行ったことはなかったので、とても興味深かった。

二日目は、発表を行った。私は、第二会場での最初から二番目の発表であった。私は、 英語での発表は二回目であったものの、緊張した。一回目の発表や韓国へ行く前開催され たリハーサルに比べ改善した点は、発表の構成をわかりやすく変更し、読みやすい英文に 変えた。また、英語の原稿を覚え、そのまま読むだけでなく、その場で考えながら英語での 発表を行うことや、読み方にメリハリをつけて発表すること、補足スライドを充実させ、質問に うまく答えられるようにすることを気をつけた。発表は、まだまだ至らない点が多く、満足いく ものではなかった。特に、質疑応答は苦労した。用意していた質問には答えられるのだが、 想定外の質問が来た場合に言葉に詰まってしまった。今後はもっと英語力を向上させようと いうモチベーションを与えて頂いたと思う。今回のシンポジウムに参加することにより、英語 の発表に慣れる機会を与えていただいただけでなく、他の学生の上手な発表を見ることで モチベーションを上げることができ、非常に有意義であったと思う。さらに、情報科学以外の 分野も同じセッションだったため、様々な分野の発表を聞くことができ、とても興味深かっ た。今後は、英語のプレゼンをもっと理解し、積極的に質問していきたいと思う。この日は夕 飯を食べたのち、大学の近くに買い物に出かけた。大学の近くはかわいいお店がたくさん 立ち並び、原宿のような雰囲気であった。大学に帰ってきたときにとても印象的だったのが、 韓国の学生の勤勉さである。 夜9時過ぎであったのだが、広い図書館は多くの学生でいっ ぱいであった。私も負けず、今まで以上に勉学に励みたいと思った瞬間であった。

三日目はポスター発表であった。私は英語でのポスター発表は初めてだった。 ポスター発表は、一対一でとても距離が近く、気軽に質問することができることが魅力だと思う。その分、アドリブが多くなる。 ポスターで発表を行うことは、楽しみながら英語を聞き、話す、良い訓練になるということをしみじみ感じた。 韓国の学生の発表を聞くだけでなく、日本の学生の発表も聞くことができ、英語の勉強と共に、他分野の発表を聞くよい機会であったと思う。 その後は夕方まで自由行動であった。 韓国の学生に教えてもらった、おいしい焼き肉屋に行ったり、化粧品を購入したり、明洞にいったり、とても充実した韓国観光であった。

もっと長く韓国に滞在したいと思えるほど、とても楽しいシンポジウムであった。来年もぜ ひ参加したいと思う。来年参加する際には、今年の反省を生かし、今まで以上に研究や英 語の勉強を行い、スキル向上していたいと思う。 参加者名(Name):福手 亜弥

所 属(Affiliation): 理学専攻 情報科学コース (指導教官(supervisor): 伊藤 貴之)

発 表(Presentation): 人流情報分析のための動線と流量の可視化手法

今回この日韓3女子大学交流合同シンポジウムを知ったとき、とても興味をもちました。私は今まで英語で発表をしたことはなかったため、英語で自分の研究を紹介するという機会を得ることができることがとても魅力的でした。さらにこのシンポジウムは今まで自分のいた情報の分野だけでなく、理系の化学、生物、物理など、さまざまな分野の方々と交流する場所であり、自分の研究は今まで同じ分野の方々に発表しただけでしたが、他の分野の方々にも知っていただけるとてもいいチャンスだと思いました。この日韓3女子大学交流合



同の申し込みを行い、ありがたいことに参加できることになったときはとてもうれしかったのですが、参加する前に 2 週間に 1 回のペースで行われる英語の発表練習を乗り切るという試練が待ち構えていました。今まで英語の発表など一度もしたことがなったので、初めのうちはどのように作ればいいか分からなかった私にこの授業は英語のパワポの作り方を伝授してくださいました。やはり、2 週間に一度のペースは他の授業や研究を進めなければならない中では苦しいのですが、これを成し遂げたときの達成感と発表するときの度胸付きはいうまでもありません。私は研究発表のとき無意識に体が震えてしまうことが多々ありましたが、この何度にも及ぶ発表練習のおかげで本番まったく震えることも緊張することもなく発表をすることができました。英語の表現や英語の発音も由良先生が細かく教えてくださり、とても勉強になりました。また、いままでは情報のまたその中でも自分の分野に近い場所での発表をしていたため、その分野の中ではあたりまえになっていることなどを、他分野の方達にわかりやすく伝える説明や構造を自分なりにいろいろ考えて、パワーポイントを作るという面でも、改めて自分の研究を立ち返るいい機会になりました。

韓国へ飛び立ち、梨花女子大学についたとき思ったのは"でかい!"です。もうそれはす ごく広く素敵なキャンパスがそこにはありました。着いて初めはそれにとても驚き感動してい たのですが、そのあと私たちを待ち受けていたのは護国寺からお茶大へ向かうあの坂道を 超える角度をもった急な坂道でした。重いキャリーケースをひきながら、終わりなき坂道をど んどん歩いていき、汗だくになりながら山を一つ分上りきり寄宿舎へ荷物をおいて、校舎へ 向かうと、笑顔が素敵な梨花女子大学の学生さんたちが待っていました。そこから開会式を へて、すぐに韓国の女子大生さんたちと交流することができました。英語でお互いの国につ いてのクイズを解き合い、フリータイムのときにお互い英語でお話をしたのですが、とても楽 しかったです。私は実は英語が得意ではなく、文法などもあっているのか不安だったので、 初めは消極的に話していたのですが、それでもあちらの学生さんたちも真剣に聞いてくれよ うとしてくださり、こっちも伝えたい、話したいという気持ちが大きくなり、すぐになりふり構わ ず自分なりに最大限もてる英語を駆使してお話をしていました。その日の夜に飲み物を近く のコンビニへ買い出しにいきました。コンビニから寄宿舎へ帰るとき梨花大学の自習室の横 を通るのですが、ちらっと見ると自習室の机が全て埋まっておりみんな真剣に勉強している のをみて、梨花女子大生の努力を惜しまない姿勢をしり、自分も負けていられないと感じま した。

次の日、私は英語発表セクション 2 の第一発表者でした。数日前にそれを聞いたときは、一番目だなんてすごく緊張すると思っていたのですが、実際やってみると、今までの学会の中で一番緊張せず開放的に発表することができました。そのあとの質問ももてるすべての英語力とボディランゲージを駆使して対応し、自分なりには満足する発表になりました。

次の日のポスター発表はいろいろな分野のかたの面白い発表を聞けて、自分の考えたこ ともない視点から見えてくるものなどを知ることができました。実際、化学や生物などは理系 といえども、まったく私がいままでやってきたこととは違う場所にあり、話をきいていて知らな いことがいっぱいでてきて勉強になりました。このポスター発表が終わったあと、閉会式があ り解散だったのですが、このあとが一番英語を使ったと思います。なぜなら、やはり英語の 発表で韓国の学生たちと交流したとはいえ、周りには数十人という日本の学生がいるため 日本語の会話が抜けきれません。しかし、解散後は友達のみ日本人であとはほぼ韓国の 方々、ということはいろいろ行動したり、尋ねたりするためには英語でその国の方々と会話す ることが必然となります。私は解散後の自由時間のときに韓国の学生さんから教えてもらっ た、とてもおいしいと評判な焼肉屋さんに行こうとしていたのですが、そこに行く為には複雑 な道のりを行かねばならないとも聞いていました。やはりそこへ向かう途中迷子になりまし た。周りには友達 1 人しかおらず、先生や英語が得意な方たちもいません。そこで道行く韓 国の人々に英語で場所を聞いては進みを繰り返しました。そんななか迷子で初対面でしか も他国の私に優しく道を教えてくださり、韓国の方々の優しさに触れることもできました。焼 肉屋さんでも近くの駅をきいたり、タクシーのおじさんにいくらかかるのかきいたり、コスメショ ップでどう使うのかきいたり、駅で出られなくなったときに駅員さんに助けをもとめたりとさまざ まな場所で英語をつかっていました。すると最後には英語で韓国の人と交流することがとて も楽しくなっていました。

日本に帰ると、当たり前ですが日本語で全て通じてしまい、若干のつまらなさを感じてしまいます。日本に戻ってから、外国の方と会う機会があったのですが、以前は気が引けてあまり話すタイプではなかったのですが、そのときは自ら英語で話しかけてしまいました。

韓国では、日本からきている方達以外は英語で会話をしなければならなかったのですが、 それはとても自分を成長させることができる環境だなと実感しました。伝わらないのならば、 自分の分かる範囲の英語力で簡単な表現に置き換えてもう一度伝えたり、また伝えきれな かった場合とてもくやしく、伝わるととてもうれしく、そんな気持ちが英語をさらに勉強したい という原動力になります。またこういう海外の方とふれあえる機会があった場合、積極的に参 加していきたいと思います。